



# 大正・昭和の吉原遊廓

法政大学江戸東京研究センター/安原眞琴編

Edited by Hosei University Research Center for Edo-Tokyo Studies and YASUHARA Makoto

EToS

江戸東京研究センター  
Hosei University Research Center for  
Edo-Tokyo Studies

〈表紙画像〉

〈表〉 吉原遊廓の大門（1910年頃）  
（画像提供：ジャパンアーカイブズ）

〈裏〉 吉原遊廓の風景（1910-19）  
（出典：New York Public Library）



明治末期の吉原大門  
(提供: ジャパンアーカイブズ)

江戸東京研究センター・シンポジウム

# 大正・昭和の吉原遊廓

江戸東京研究センターでは昨年春、戦前の遊廓を回想した資料の寄贈を受けました。著者は根津、洲崎、吉原へと移転した妓楼の主人であった人物で、明治末から昭和初期にかけての遊廓をめぐる貴重な記録の宝庫であることがわかってきました。本シンポジウムはその内容の一端を、近代吉原についての調査を進めている安原眞琴さんに読み解いてもらい、その時代の吉原を知る、また聞き伝えている「中」の方々にお話をうかがいしつつ、大正・昭和の吉原について多角的に考えようとする企画です。

主催: 法政大学江戸東京研究センター「江戸東京の『ユニークさ』」プロジェクト

## 【プログラム】

10:00~  
映画上映  
「最後の吉原芸者四代目みな子姐さん吉原最後の証言記録」

-----昼休み-----

13:00~(50分)  
安原眞琴(立教大学, 法政大学)  
「吉原遊廓の「中の人」の手記-成八幡の旦那・中野幸吉」

14:00~(50分)  
吉原達雄(吉原神社総代)  
「生き証人にきく-吉原の昭和史」(聞き手 安原眞琴)

15:00~(30分)  
不破利郎(吉原商店会会長)  
「私が暮らした吉原」

15:30~(10分)  
田中優子(法政大学江戸東京研究センター特任教授)  
コメント

15:50~17:00  
登壇者全員によるトークセッション(司会・安原眞琴)

2022年3月11日(金)10時~17時  
法政大学市ヶ谷キャンパスより  
オンライン配信

参加無料  
事前申込が必要です

オンラインの接続先は事前申込を  
いただいた方のみにご連絡します。



事前申込: <https://forms.gle/QstPjX3ejWqgMWN29>

EToS 江戸東京研究センター  
Hosei University Research Center for  
Edo-Tokyo Studies

法政大学  
HOSEI University

法政大学江戸東京研究センター: [edotokyo-jimu@ml.hosei.ac.jp](mailto:edotokyo-jimu@ml.hosei.ac.jp) 03-3264-9682

## はしがき

法政大学江戸東京研究センターでは、2021年4月に近代遊廓についてのまとまった資料の寄贈を受けました。明治なかばに洲崎で妓楼を営む家に生まれ、その後、吉原で妓楼を営んだ人物が残した、原稿用紙約250枚に及ぶ筆録です。次ページ以下に一例を掲載するように<sup>(1)</sup>、近代の遊廓の諸事情を妓楼の経営者の視点で内側からみた記録として重要なものであらうと考え、その分析を近代吉原のオーラルヒストリーを手がけられ、本学でも兼任講師を務めていただいている安原眞琴氏に依頼したのが本企画の始まりです。

その成果をご発表いただくにあたり、せっかくの機会でもあり、その筆録が書き残した時代以降の吉原を知る方々のお話を記録にとどめようという安原氏の提案を受けてシンポジウム「大正・昭和の吉原遊廓」を開催することにしました。それが寄贈から約1年後の2022年3月11日(金)、安原氏の報告に続いて、吉原神社総代の吉原達雄氏、吉原商店会会長不破利郎氏にそれぞれの記憶のなかの吉原についてお話しいただきました。

近代の吉原は、芸能・文化の一大拠点であった近世の新吉原遊廓の遺産を引き継ぎつつ花柳界独特の文化を発展させた一方で、廃娼運動、さらに赤線廃止という時代の波にさらされました。そのような近代吉原の歴史を肌で知る人びとの声の記録として、吉原遊廓研究に資するものとなることを願っています。

末筆ながら資料をご寄贈くださいました石田知生氏、本報告書の編集をお引き受けくださった安原眞琴氏、ご講演とその記録の公開をご快諾いただいた吉原達雄氏・不破利郎氏、紙面の構成・編集実務を担われた徐玄九氏にあらためて深謝申しあげます。

---

<sup>(1)</sup> 「お米さん」『吉原妓楼（成八幡支店）元楼主の手記』所収。この「お米さん」の内容からは、引手茶屋の作りや稽古事情がうかがわれる。2021年4月、ご遺族より当センターに寄贈された。

2023年2月吉日

法政大学江戸東京研究センター

(2020・21年度「江戸東京のユニークさ」プロジェクト・リーダー)

小林 ふみ子

ミネ

のお米さん

私の両親は大変遅い子持で、肉では子宝が授

からないと諦めて、名古屋なる父の妹が十人前

後の子福者だったのて、その二番目の娘を養女

にももらった。これがこのお米さんである。

東京へきたのが五六歳の頃(明治廿二、三年)近

所に小学校がないので、近くにある南東塾とい

ふ昔の寺小屋にも似た私塾に、何年か通つて修

業した。もと名古屋といふ所は遊芸の盛人

好所で、その為か唄や踊が大好きで、長唄、清元、端

よ	引	踊	ふ	日	め	と	つ	て	唄
う	手	を	し	清	る	三	た	お	さ
で	茶	知	か	談	の	味	だ	稽	さ
お	屋	っ	っ	判	で	線	か	古	て
見	の	て	ほ	破	私	を	ら	し	は
世	作	い	れ	裂	も	持	夕	た	花
で	り	た	深	し	光	ち	方	の	柳
あ	は		川	て	水	出	に	で	流
り	吉		猫	馬	に	し	な	ほ	の
居	系		じ	関	つ	て	る	ん	舞
間	で		や	を	ら	何	と	と	踊
で	も			乗	れ	か	日	う	ま
あ	洲			り	て	お	課	に	で
る	崎			出	何	稽	の	芸	お
所	で			す	か	古	よ	達	師
は	も			吾	踊	ご	う	者	匠
大	お			妻	り	と	に	の	さ
体	な			艦	出	を	き	人	ん
八	な			法	し	ほ	つ	で	に
疊	じ			界	た	じ	あ	あ	つ
									い

思 <small>オモ</small> へは五六 <small>サイ</small> 六 <small>ロク</small> の頃 <small>コト</small> だから <small>カラ</small> 随 <small>ズイ</small> 分 <small>ブン</small> 高 <small>コウ</small> 慢 <small>マン</small> ち <small>チ</small> き <small>キ</small> のよ <small>ヨ</small>	つた <small>ツタ</small> 花 <small>ハナ</small> 水 <small>ミヅ</small> が又 <small>マタ</small> 私 <small>シ</small> には <small>ニ</small> ほ <small>ホ</small> 得 <small>トク</small> 意 <small>イ</small> であ <small>デ</small> あ <small>ア</small> つた <small>ツタ</small>	の <small>ノ</small> 人 <small>ヒト</small> が <small>ガ</small> こ <small>コ</small> の <small>ノ</small> 縁 <small>エン</small> 台 <small>ダイ</small> に <small>ニ</small> 腰 <small>コシ</small> 掛 <small>カケ</small> て <small>テ</small> 見 <small>ミ</small> 物 <small>モノ</small> して <small>シ</small> て <small>テ</small> い <small>イ</small> き <small>キ</small> の <small>ノ</small> で <small>デ</small> あ <small>ア</small>	く <small>ク</small> る <small>ル</small> 踊 <small>オド</small> り <small>リ</small> で <small>デ</small> も <small>モ</small> 唄 <small>ウタ</small> でも <small>モ</small> ほ <small>ホ</small> じ <small>ジ</small> ま <small>マ</small> る <small>ル</small> と <small>ト</small> き <small>キ</small> つ <small>ツ</small> と <small>ト</small> 五 <small>イ</small> 六 <small>ロク</small> 人 <small>ニン</small>	い <small>イ</small> もの <small>モノ</small> だ <small>ダ</small> か <small>カ</small> ら <small>ラ</small> 三 <small>サン</small> 味 <small>ミ</small> 線 <small>セン</small> の <small>ノ</small> 音 <small>ネ</small> に <small>ニ</small> 誘 <small>サウ</small> は <small>ハ</small> れ <small>レ</small> て <small>テ</small> 親 <small>シン</small> き <small>キ</small> み <small>ミ</small> に <small>ニ</small>	時 <small>ジ</small> 間 <small>カン</small> が <small>ガ</small> 早 <small>ハヤ</small> い <small>イ</small> し <small>シ</small> 系 <small>ケイ</small> 八 <small>ハチ</small> 幡 <small>ハン</small> が <small>ガ</small> 角 <small>カド</small> で <small>デ</small> す <small>ス</small> ぐ <small>ク</small> 目 <small>メ</small> に <small>ニ</small> つ <small>ツ</small> き <small>キ</small> や <small>ヤ</small> す <small>ス</small>	る <small>ル</small> 宵 <small>ヨイ</small> の <small>ノ</small> 中 <small>ナカ</small> 繰 <small>フリ</small> 込 <small>コ</small> み <small>ミ</small> 人 <small>ヒト</small> で <small>デ</small> く <small>ク</small> る <small>ル</small> 素 <small>ヒヤカシ</small> 見 <small>ミ</small> が <small>ガ</small> 素 <small>ヒヤカシ</small> 見 <small>ミ</small> す <small>ス</small> る <small>ル</small> に <small>ニ</small> は <small>ハ</small>	げ <small>ゲ</small> お <small>オ</small> あ <small>ア</small> し <small>シ</small> の <small>ノ</small> ど <small>ド</small> き <small>キ</small> る <small>ル</small> ニ <small>ニ</small> 尺 <small>シヤク</small> 中 <small>ナカ</small> 位 <small>イ</small> の <small>ノ</small> 縁 <small>エン</small> 台 <small>ダイ</small> が <small>ガ</small> つ <small>ツ</small> い <small>イ</small> て <small>テ</small> い <small>イ</small>	は <small>ハ</small> 障 <small>ショウ</small> 子 <small>ジ</small> で <small>デ</small> 真 <small>マン</small> 中 <small>ナカ</small> に <small>ニ</small> 素 <small>ス</small> 通 <small>トウ</small> し <small>シ</small> の <small>ノ</small> 硝 <small>ガラ</small> 子 <small>ス</small> 障 <small>ショウ</small> 子 <small>ジ</small> の <small>ノ</small> と <small>ト</small> ほ <small>ホ</small> 揚 <small>ア</small>	位 <small>イ</small> 長 <small>チヤウ</small> 火 <small>カ</small> 鉢 <small>ハチ</small> と <small>ト</small> 茶 <small>チャ</small> 華 <small>カ</small> 筭 <small>サン</small> が <small>ガ</small> あ <small>ア</small> つ <small>ツ</small> て <small>テ</small> 外 <small>ソト</small> に <small>ニ</small> 面 <small>オモ</small> し <small>シ</small> に <small>ニ</small> と <small>ト</small> こ <small>コ</small> ろ <small>ロ</small>
---	--	--	---	--	---	---	--	--	--

うで あった。 だが から 甚事ゲイゴトは 何ナニでも 心得ココロエて いた

うな もの だが 今イマと なつて は 何ナニも か も 忘ワスれ て し

ま った。 と いふ の も 洲崎スサキと か 遊廊ユウカウと か いふ こ

と 互ヒト人ニに 知シら れる の が いや で 殊コトに 中ケ学ニに いく

よ う に なつ て から 余計ヨケイえ の よう な こと に 気キを

つ か った。 だ から 吉原ヨシハラへ 引越ヒッコし て から も 同業ドウギョウ

者モノの 宴エン会カイな ど に 附ツキ合アイは した が 隠カクし 甚ゲイな だ し

た 事コトは な かつ た。 絶ツえ ず といふ 考カンえ 方カタで あ

つ た から 此ココれ が 私ワタシの 習性シユウセイと なつ た よう だ。

今イマ考カンえ て 見ミれば 見ミたり 聴キい たり は 好スま ず だ も

自分自身は無芸でよかつたやでよかつたか

若い時から好むが、米、に遊芸に身を入れたら

今の私ほなかつたかと思ふ

話は前え戻つてお米さんほ天性美貌美声の

持主で、郵でも評判の娘であつた

洲崎芸妓組合(見番)の楼上で花柳流の火温習

会(おさらび)があつたとお米さんほ牛若丸引

手茶屋玉屋の一人娘おか米さんは弁慶に扮し

長唄五條橋を踊つて大評判とつたことを今

でも覚えてる。長ずるに及び新橋(南金六町)

ワリエス?

つ	真	す	お	六	屋	京	事	つ	で
た	の	面	米	月	の	帝	魔	子	恵
の	親	親	さ	六	実	大	多	婆	比
か	の	も	ん	日	家	病	し	や	身
わ	如	我	の	遂	に	院	と	な	家
か	く	が	死	に	戻	で	と	ど	と
ら	慕	子	去	不	つ	大	い	四	い
ず	つ	の	ま	帰	て	手	ふ	五	ふ
私	て	如	で	の	静	術	べ	人	芸
も	い	久	私	人	養	を	き	お	家
真	た	可	は	と	に	う	か	い	を
の	の	愛	全	な	つ	け	そ	て	南
姉	て	が	く	つ	と	退	の	繁	業
と	何	り	養	め	め	院	後	昌	お
ば	で	お	女	た	た	し	脊	し	酌
か	名	米	と	が	が	て	體	て	(半
り	古	さ	は	廿	廿	か	に	い	玉)
思	屋	人	知	八	八	、	か	た	下
つ	へ	も	ら	丈	丈	り	、	が	地
て	行	亦		の	の	東	り	好	

いた<sup>リョウレン</sup>に<sup>カギ</sup>けに<sup>サビ</sup>限<sup>カギ</sup>りあ<sup>サビ</sup>い<sup>サビ</sup>淋<sup>サビ</sup>しさ<sup>サビ</sup>であ<sup>サビ</sup>った<sup>サビ</sup>

雨<sup>リョウレン</sup>親<sup>リョウレン</sup>は<sup>リョウレン</sup>た<sup>リョウレン</sup>い<sup>リョウレン</sup>そ<sup>リョウレン</sup>う<sup>リョウレン</sup>天<sup>テン</sup>理<sup>リ</sup>教<sup>キョウ</sup>と<sup>キョウ</sup>信<sup>シン</sup>仰<sup>コウ</sup>し<sup>コウ</sup>て<sup>コウ</sup>い<sup>コウ</sup>て<sup>コウ</sup>お<sup>コウ</sup>朱<sup>シュ</sup>

さん<sup>スウ</sup>を<sup>スウ</sup>養<sup>ヨウ</sup>女<sup>ニョ</sup>に<sup>ニョ</sup>し<sup>ニョ</sup>て<sup>ニョ</sup>か<sup>ニョ</sup>ら<sup>ニョ</sup>も<sup>ニョ</sup>月<sup>ツキ</sup>詣<sup>マイ</sup>は<sup>マイ</sup>か<sup>マイ</sup>、<sup>マイ</sup>さ<sup>マイ</sup>ず<sup>マイ</sup>教<sup>キョウ</sup>年<sup>ネン</sup>

後<sup>ゴ</sup>私<sup>シ</sup>が<sup>シ</sup>生<sup>ウマ</sup>れ<sup>ウマ</sup>た<sup>ウマ</sup>殊<sup>コト</sup>に<sup>コト</sup>男<sup>オトコ</sup>の<sup>オトコ</sup>子<sup>コ</sup>だ<sup>コ</sup>と<sup>コ</sup>い<sup>コ</sup>ふ<sup>コ</sup>の<sup>コ</sup>で<sup>コ</sup>之<sup>コレ</sup>も<sup>コレ</sup>備<sup>ヒトエ</sup>

に<sup>テン</sup>天<sup>テン</sup>理<sup>リ</sup>様<sup>リョウ</sup>の<sup>リョウ</sup>中<sup>チュウ</sup>利<sup>リ</sup>益<sup>イキ</sup>と<sup>イキ</sup>て<sup>イキ</sup>深<sup>フカ</sup>川<sup>ガハ</sup>仲<sup>ナカ</sup>所<sup>ショウ</sup>に<sup>ショウ</sup>あ<sup>ショウ</sup>る<sup>ショウ</sup>天<sup>テン</sup>理<sup>リ</sup>教<sup>キョウ</sup>

深<sup>フカ</sup>川<sup>ガハ</sup>分<sup>ブン</sup>教<sup>キョウ</sup>会<sup>カイ</sup>の<sup>カイ</sup>所<sup>マケ</sup>田<sup>ヂ</sup>会<sup>カイ</sup>長<sup>チョウ</sup>さ<sup>チョウ</sup>ん<sup>チョウ</sup>の<sup>チョウ</sup>所<sup>トコロ</sup>へ<sup>トコロ</sup>中<sup>ナカ</sup>禮<sup>レイ</sup>に<sup>レイ</sup>ゆ<sup>レイ</sup>き

此<sup>コノ</sup>の<sup>コノ</sup>時<sup>トキ</sup>会<sup>カイ</sup>長<sup>チョウ</sup>さ<sup>チョウ</sup>ん<sup>チョウ</sup>か<sup>チョウ</sup>ら<sup>チョウ</sup>こ<sup>チョウ</sup>の<sup>チョウ</sup>子<sup>コ</sup>は<sup>コ</sup>さ<sup>コ</sup>い<sup>コ</sup>わ<sup>コ</sup>い<sup>コ</sup>よ<sup>コ</sup>し<sup>コ</sup>た<sup>コ</sup>

か<sup>コウ</sup>ら<sup>コウ</sup>幸<sup>キョウ</sup>吉<sup>キキ</sup>と<sup>キキ</sup>な<sup>キキ</sup>さ<sup>キキ</sup>い<sup>キキ</sup>と<sup>キキ</sup>い<sup>キキ</sup>は<sup>キキ</sup>れ<sup>キキ</sup>私<sup>シ</sup>の<sup>シ</sup>名<sup>ナ</sup>が<sup>ナ</sup>さ<sup>ナ</sup>ま<sup>ナ</sup>つ<sup>ナ</sup>た<sup>ナ</sup>

と<sup>ト</sup>い<sup>ト</sup>ふ<sup>ト</sup>こ<sup>ト</sup>と<sup>ト</sup>た<sup>ト</sup>の<sup>ト</sup>後<sup>ゴ</sup>三<sup>サン</sup>年<sup>ネン</sup>た<sup>ネン</sup>つ<sup>ネン</sup>て<sup>ネン</sup>妹<sup>イモエ</sup>た<sup>イモエ</sup>ま<sup>イモエ</sup>更<sup>サラ</sup>に<sup>サラ</sup>

四<sup>シ</sup>年<sup>ネン</sup>た<sup>ネン</sup>つ<sup>ネン</sup>て<sup>ネン</sup>妹<sup>イモエ</sup>か<sup>イモエ</sup>ね<sup>イモエ</sup>が<sup>イモエ</sup>生<sup>ウマ</sup>れ<sup>ウマ</sup>た<sup>ウマ</sup>

天<sup>テン</sup>理<sup>リ</sup>様<sup>サマ</sup>の<sup>オ</sup>申<sup>ク</sup>託<sup>ク</sup>宣<sup>セン</sup>は<sup>フ</sup>標<sup>ス</sup>ぐ<sup>フ</sup>つ<sup>タ</sup>い<sup>イ</sup>よ<sup>ウ</sup>う<sup>ナ</sup>気<sup>キ</sup>も<sup>ス</sup>

る<sup>ガ</sup>と<sup>ニ</sup>か<sup>エ</sup>ハ<sup>ノ</sup>才<sup>サイ</sup>過<sup>ス</sup>ま<sup>デ</sup>生<sup>イ</sup>き<sup>ラ</sup>れ<sup>タ</sup>と<sup>イ</sup>ふ

こ<sup>ト</sup>は<sup>ハ</sup>有<sup>アリ</sup>難<sup>カ</sup>い<sup>ト</sup>思<sup>フ</sup>つ<sup>テ</sup>い<sup>ル</sup>。

之<sup>コ</sup>は<sup>タ</sup>只<sup>ヒ</sup>一<sup>コ</sup>人<sup>コ</sup>幸<sup>コ</sup>吉<sup>ウ</sup>ば<sup>カ</sup>り<sup>デ</sup>な<sup>ク</sup>我<sup>ワ</sup>が<sup>カ</sup>一<sup>カ</sup>家<sup>カ</sup>一<sup>モ</sup>内<sup>シ</sup>

が<sup>オ</sup>申<sup>ク</sup>託<sup>ク</sup>宣<sup>セン</sup>の<sup>ト</sup>通<sup>ト</sup>り<sup>サ</sup>い<sup>ワ</sup>い<sup>デ</sup>あ<sup>リ</sup>た<sup>イ</sup>と<sup>ネ</sup>預<sup>カ</sup>つ<sup>テ</sup>

い<sup>ル</sup>。

## 目 次

シンポジウムプログラム ..... 1

はしがき ..... 3

## 講 演

吉原遊廓の「中の人」の手記—成八幡の支店さん・中野幸吉

..... 安原 眞琴 17

## 対 談

「生き証人にきく—吉原の昭和史」（聞き手：安原眞琴）・吉原 達雄 35

「私が暮らした吉原」（聞き手：安原眞琴）..... 不破 利郎 53

コメント..... 田中 優子 69

総合討論..... 79

出席者：吉原 達雄、不破 利郎、田中 優子、小林 ふみ子

司 会：安原 眞琴

# 講演

# 吉原遊廓の「中の人」の手記

—成八幡の支店さん・中野幸吉—

安 原 眞 琴

## 1 はじめに

このシンポジウムは1つの手記から始まりました。中野幸吉さんという、昭和50年(1975)で81歳になられた方がまとめられたもので、お孫さんが当センターに送られたのでした。この手記は、自分史にとどまらず、大正末期から戦前までの吉原の記録、しかも貸座敷のご主人という、吉原の「中の人」の記録が記された貴重な資料でもあります。

そして、センターから私に“近代の吉原に詳しい研究者”として連絡がありました。2013年に、『最後の吉原芸者四代目みな子姐さん—吉原最後の証言記録』という映像記録を製作し、法政大学でも上映させていただいたことがあるからです。この映像記録は、吉原芸者四代目みな子姐さんに5年ほど密着して、ほぼ1人で制作したものです。みな子姐さんも吉原遊廓なき後、お1人で吉原芸者を続けていらした方です。

吉原と聞くと風俗街のイメージが強いと思いますが、それは近代以降、特に戦後からで、歴史を振り返ると、江戸時代初期に江戸で唯一公認された遊び場「遊廓」として誕生し、昭和33年(1958)まで続いた、およそ350年の歴史を持つエリアです。

みな子姐さんが吉原芸者をされていた昭和初期からの約80年間は、江戸時代の面影を残しつつ風俗街へと変わりゆく時代でした。みな子姐さんは前者、つまり江戸時代からの流れを受けた最後の吉原芸者として生き続けました。

中野幸吉さんも、みな子姐さんと重なる時期に吉原にいらした方ですが、幸吉さんとみな子姐さんとは、貸座敷のご主人と芸者さんという立場の違いがあるので、見える景色も違ったはずですよ。2人は会ったこともなかったと思います。

余談めきますが、吉原は「遊び場」とはいえ、「大都市」ともいえるほどの大きな社会を形成していました。遊女や芸者はもちろんですが、貸座敷や引手茶屋のご主人や、雇われている人々、日常の買い物をするお店もあれば、そこにいろいろな客も加わり、何千、何万の人々が集っていました。

本シンポジウムでは、中野幸吉さんの手記の中から吉原に関する記述を紹介させていただきますが、時間も限られているので概要しかお伝えできません。また、吉原以外にも大正・昭和初期の銀座や洲崎遊廓、或いは社会風俗など興味深いこともたくさん記録されているのですが、これらについても割愛いたしました。

これも余談めきますが、発表のタイトルに書いた「中の人」とは、吉原は「廓」と書いて「なか」と呼ばれていたもので、それを取り入れたものですが、ちょうど最近も「中の人」という言葉が別の意味で流行っているようなので、それも掛けて使いました。

新語の「中の人」は、バーチャルユーチューバーなどに使われています。人間の動きが、スマートフォンなどの画面上ではバーチャルキャラクターとして映るという仕組みで、その仮想キャラクターの背後にいる人間のことを「中の人」と言うようです。

さて、吉原の「中の人」による手記は、ありそうで多くないようです。国立国会図書館の全文検索でも「中の人」の本や記事はあまりありません。このことから中野幸吉さんの手記は貴重な資料といえるでしょう。参考までに、貸座敷と引手茶屋の経営者という立場にあった「中の人」の本を4冊あげておきました。

- 1) 引手茶屋・松葉屋の福田利子さんが書いた『吉原はこんな所でした——廓の女たちの昭和史』（主婦と生活社、1986年）

- 2) 貸座敷・大文字楼の波木井皓三さんが書いた『大正・吉原私記』（青蛙房、1978年、新装版：2013年）
- 3) 貸座敷・沢瀉屋の喜熨斗古登子さんの聞き書きを宮内好太朗さんがまとめた『吉原夜話』（青蛙房、1964年、新装版：2012年）
- 4) 3の古登子さんのご子息市川小太夫さんが書いた『吉原史話』（東京書房、1964年）と『続吉原史話』（邦楽と舞踊社、1968年）

さらに、このシンポジウムでは、中野さんの手記に次いで、現在も吉原で商売をされているお2人の「中の人」のお話もうかがいました。中野さんの手記では戦前までの吉原が語られ、現在の「中の人」は戦中、戦後、現在までの吉原のことを話されます。本シンポジウムによって、大正から現在までの、聞き書きによる吉原の近現代史が一通りつながることになります。

なお、シンポジウム時の私の発表タイトルは「成八幡の旦那」でしたが、この報告書では「成八幡の支店さん」に訂正しました。ひとえに私の誤読によるものですが、それだけ中野幸吉さんの親戚関係が複雑なためでもあります。これはまた、吉原で貸座敷を開業した方のきっかけを知る一資料にもなりますので、あらためて後述したいと思います。

## 1 手記の特徴

中野幸吉さんの手記は、すべて原稿用紙に書かれており、およそ253枚という1冊の本になるほどの分量があります。このような大量の手記を、いつ頃、なぜ、どのようにまとめたのかについては、ご自身が書かれているので、少々長くなりますが引用します（ルビを省略した他、読みやすさをはかって適宜読点を加え、表記を変えるなど変更しました。以下同様です）。

昭和48年（79才）、同じく49年（80才）の2年間は在宅時代がつづいたのである。75才からは都知事より老齢年金5千円と、年3回支払をうけているが、之で自分の小遣がやっとなのである。政府としても健康で高齢者に適応した職あらば、もっともっと力を注ぐべきではなかろうか。

毎日退屈で無為に過ごすのも如何なるものであろうかと昔の思い出話など随時随想書いてきたが、その控を調べてみると、はじめたのが47年11月13日。爾来、49年12月末日迄、約500頁近く書いた。(中略)これで一区切ついたつもりだが、幸い昭和50年になってもまだまだ書きつづけていきそうだから、筆を新にして書ける処までつづけてゆこう。もっとも書いたものすべてが私の記憶から出たものではない。いろいろ参考にしたものがあり、<sup>もうろく</sup>耄碌の私が書けよう筈がないので念の為。

以下に、ここから分かることをまとめてみました。

1、手記をまとめたのは、就職活動しても高齢のため仕事に就けず在宅が続き暇だったため。

これには補足が必要で、幸吉さんは、後述するように、いつどんなときでも今自分ができる精一杯のことをやるといった性格なので、在宅時代における最良の〈仕事〉が手記をまとめることだったのだと思います。

2、78歳の11月13日から書き始め、昭和49年(1974)、80歳の12月末日で一区切りついたものの、昭和50年(1975)、満81歳になってもまだ書けそうなので書き続けています。

3、日付を明記したり、老齢年金の金額を明示するなど、記録が詳細で正確です。また、引用では省略しましたが、字もとてもキレイな上に総ルビで、訂正箇所も定規を使って二重線を引いていますし、新聞記事や地図などの引用資料も丁寧に切って入れてあります。小学校の思い出も同様なので、幼い頃から日記をつけて記録しておく習慣があったのでしょう。戦時中でも日記をつけていたようです。

性格もまた真面目で、手記には次のように記されています。

20年近い<sup>かくない</sup>廓内の生活中、いろいろな会合、宴会、旅行は 数え切れぬ程 沢山あったが、二次会・三次会という横道にそれたことは一度もなかった。

それが為、業者仲間から『神様』という仇名がつけられていたことを榮譽に思っている。

4、引用の最後に「すべて私の記憶から出たものではない」とあるように、人から聞いたり、参考文献によるものも含まれていますが、それは後半に多いようです。

以上、上記の引用文から分かる特徴をあげてみましたが、それ以外に気付いたことを多少加えておきたいと思います。

5、手記には、読まれることを意識して分かりやすくまとめられた章と、思い出すままに断片的に書かれた章があります。後掲の目次で言うと、18章までが前者、19章以下が後者に分けられるようです。前者には幸吉さんご自身に関わる家族や仕事などの思い出が記されていますが、後者には章段にも脈絡はありません。

この違いについては、29章に次のように記されています。

昭和49年年末で『我八拾年』と題した自分の生活記録を書き終わったので、何やら「ホット」した気持ちになった。けれ共その後執筆をつづけないと遺書じみるので、もっと書きつづける気になった。といっても奇想天外の記録があるわけではないし、結局我郷土のことに及ぶのであった。

そして続けて「吉原の菓子」の思い出、例えば、江戸町二丁目の「竹村」や「二葉屋」などの菓子屋や、そこで売られていたお菓子のことなどが記されま

す。  
このように後者にも、断片的ながら吉原に関する興味深い内容が、少なからず含まれています。25章〈電々台東文芸同好会の方々〜〉に、朝日新聞への投書内容を引用していますが、そこには「五十間道」や「猿若町」の読み方や、「吉原観音」の正式名称、「松葉屋」の歴史（前掲福田さんの先代）などが記

されています。また、これは13章ですが、浅草のみならず、吉原の東町あづまちょうにもパノラマ館があったことを、叔父（成八幡の主人）が発起人だったので、幸吉さんはまだ12、3歳だったけれどもハッキリ記憶していると記されています。

吉原とは関係ありませんが、33章〈チェーンストア昔ばなし（牛屋の「いろは」等）〉には、木村荘八の父親のことが書かれるなど文化史や文学史に関わる内容も見られます。

6、もう1つは、吉原や遊女のことよりも、叔父がほかの人の代わりに警察に捕まるという親族の一大事や、町会役員として廃娼運動に奔走したことなどに紙面が割かれていることです。

廓の「外の人」には吉原といえば遊女のイメージが強いですが、「中の人」、特に貸座敷の経営者にとっては、遊女は生活や仕事の一部なので、事件か何かがなければ日記にしたためることもない代わりに、親戚の警察沙汰や町会の役員の仕事などは、人生にとって重要な出来事と認識されていたため、日記に書き留められたのだと思います。

## 2 手記の目次

手記は、一気に書き上げたものではなく、小見出しのあるいくつかの原稿をまとめたものです。お孫さんが本センターに送る際、それらの小見出しを目次のタイトルに変えてまとめてくださったので、以下にそれを引用させていただきます。

- 1 私の八拾年（成八幡支店楼主）
- 2 我家の変遷と両親の臨終（洲崎遊廓～吉原）
- 3 銀座思い出の記
- 4 稲村ヶ崎在住八〇年松島邸の想出（成八幡別荘）
- 5 松島家の古いはなし
- 6 お米さん
- 7 廓よもやまばなし

- 8 廓うらばなし様々
- 9 根津遊廓が洲崎へ引越した時の話
- 10 明治廿七，八年頃の洲崎遊廓の略図
- 11 影法師（取り調べ）
- 12 影法師—補足
- 13 昭和四拾九年九月廿日（大パノラマ館について）
- 14 昭和四拾九年九月廿日—補足
- 15 吉原遊廓出身又は関係のあった異色ある人々
- 16 戦後三十年（東京大空襲について）
- 17 江幡静夫の全国廃娼大会潜伏記
- 18 忘れ得ぬ感激の送別会（遊廓廃業）
- 19 演歌の添田亜蟬坊
- 20 福地桜痴（洲崎の引き手茶屋・糸八幡の客について）
- 21 福地桜痴居士のことなど
- 22 まちの音 まちの声
- 23 まちの音 まちの声—補足
- 24 N, H, K, へ投書（大門の呼び方について）
- 25 電々台東文芸同好会の方々～（様々、呼び名について）
- 26 昔の歌のいろいろ
- 27 続昔の歌いろいろ
- 28 昔の子供の遊び種々
- 29 もっと書きつづけよう（菓子について）
- 30 甘い物のはなしあれこれ
- 31 古い日記帳から（一）（廃業前、家族について）
- 32 古い日記帳から（その二）（廃業について、娼妓・雇い人）
- 33 チェーンストア昔ばなし（牛屋のいろは等）
- 34 墜落した永代橋（亡父の昔話）
- 35 今は昔懐しい奥山界限の想出
- 36 久しぶりで会った田中氏の話（吉原その後の噂話）
- 37 門跡さま

## 江戸時代よし原の因果話その他-補足

## 江戸時代よし原の因果話その他

1章が、前述した「遺書じみ」た内容の、端的にまとめられた自分史になっています。そこには、まず、ご自身で人生を6期に分類されて目次とし、次いで、時期ごとに各々の出来事が綴られているので、以下に、この6期の目次を引用することで、幸吉さんの人生を簡単に振り返りたいと思います。

- 1、洲崎時代（生まれてから明治43年（1910）、17歳迄、17年間）
- 2、横浜時代（大正6年（1917）、24歳迄、7年間）
- 3、銀座時代（大正11年（1922）、29歳迄、5年間）
- 4、吉原時代（昭和16年（1941）、47歳迄、18年間）
- 5、会社員時代（昭和47年（1972）、78歳迄、31年間）
- 6、在宅時代（昭和49年（1974）、80歳迄、2年間）

1期の「洲崎」は洲崎遊廓のことです。ご両親は洲崎で仕事をされていましたが、4期の「吉原」に移ることになり、さらに幸吉さんが継ぐことになったのです。6期の「在宅時代」は前述したので省略します。

残る2、3、5期の「横浜」「銀座」「会社員」は、すべてサラリーマンだった時期です。2期と3期は大正時代のことで、2期「横浜」は、家庭の事情で旧制中学校の2年生までしか通えずに「河野七宝店」に奉公に行った時期、3期「銀座」は、貸座敷業を継ぐのがいやで、「時事新報」の求職欄に三行広告を出し、連絡を受けた4社中1社「矢沼商会」に勤めることにした時期です。いずれも貿易会社で、会計を担当していました。

会計・経理については、手記に次のように記されています。

夜になると店（横浜時代の奉公先：安原注）を締めるので、三、四人いる店員は思い思い小机を出して勉強した。私は早稲田大学出版部から出ている『早稲田中学講義録』をとり一年半で卒業すると、更に『早稲田商業講義録』をとり、之亦一年半で卒業証書をもらった。この時大層興味を持

ったのが簿記で、之がはしなくも将来の役にたったのか、その後の進路はいつも経理会計に関する仕事が多かった。

5期「会社員」は、吉原での商売を廃業した後の戦後のことです。合計12社に勤めましたが、そのうち7社は「発起人が自己資金を持たず、所謂『みせ金』で設立登記した法人で、永続したもので4年位で、結局経営困難となった」と書いてあり、その他の会社については、7社よりはましだったのでしょうが触れられていません。銀座時代が人生で最もよい時代だったと、わざわざ章を分けて3章で詳述しているのとは対照的です。

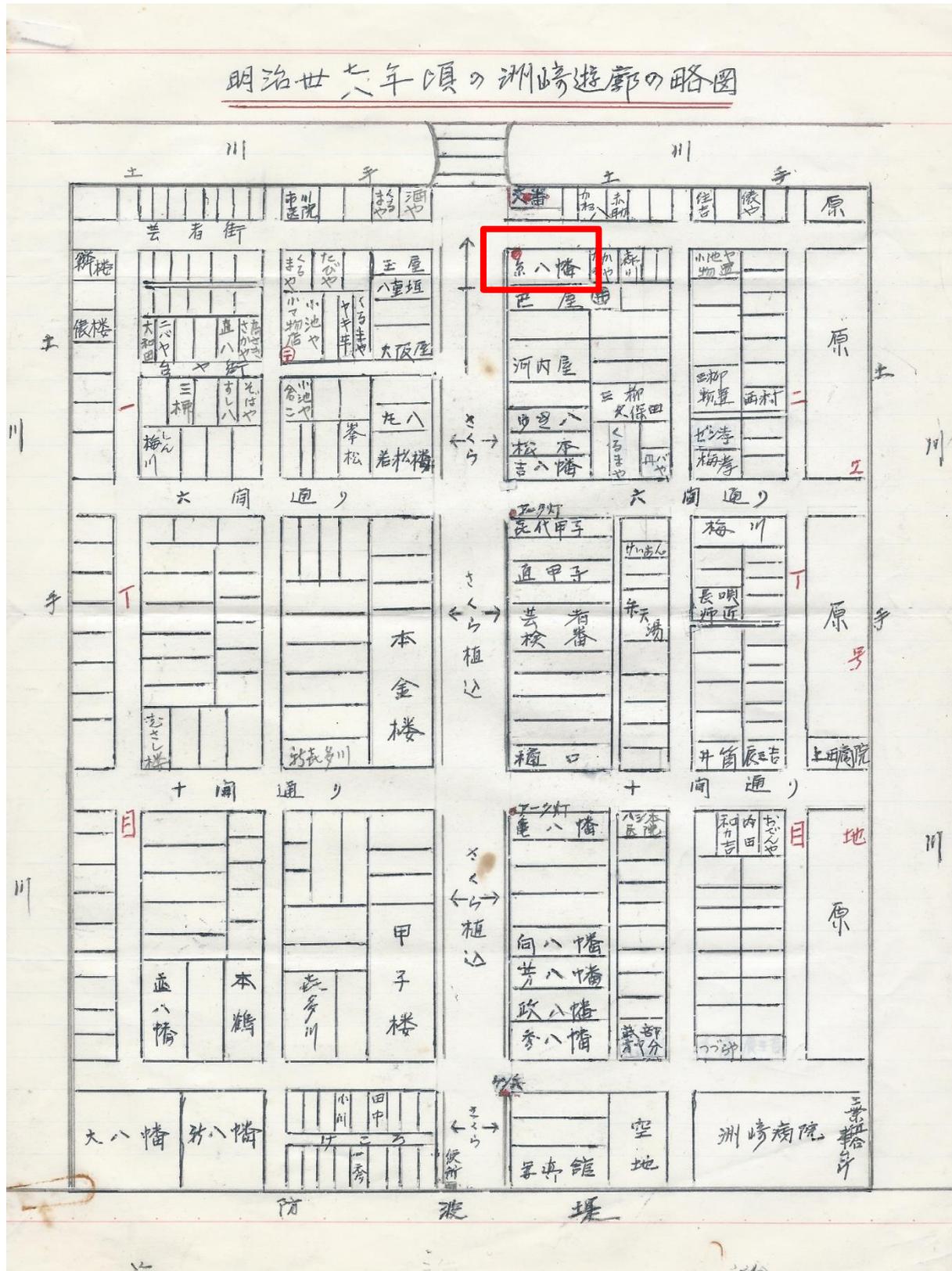
### 3 幸吉さんのご両親が吉原で貸座敷を開業するまで

幸吉さんの父・中野次郎吉は、尾張出身で、若い時江戸に出て、根津遊廓で商売をしていた大久保金次郎の世話で、根津の「新八幡」の書記になりました。ところが、根津の近くに東京大学(帝国大学)の校舎が建つことになったため、急遽埋立地に洲崎遊廓が新設され、明治21年(1888)に移転させられました。

中野次郎吉さんは、この移転の際に、洲崎で引手茶屋「糸八幡」を開業しました。後に母となるせいと世帯を持ったのもこの頃です。そして幸吉さんが、明治27年(1894)に生まれました(昭和50年〈1975〉に満81歳になったとの記述があることによります)。

この頃の洲崎は、広さは吉原よりも広く、真ん中の道も幅が広く、両側が桜並木にはなっていたけれども、「電気、瓦斯灯などない」ので夜は真っ暗。そんな荒地だったので、最初の10年間は地租も免除されていたそうです。

10章には「明治37、8年頃の洲崎遊廓の略図」が描かれています[写真1]。この地図も貴重ではないかと思います。ここにも「空地」や「原」などと記されていますが、そんな中「糸八幡」は、橋を渡ったすぐの角、吉原で言えば、大門をくぐってすぐ左の、とてもよい場所に建っていて、人気もあったようです。



[写真 1] 「明治 37、8 年頃の洲崎遊廓の略図」

『吉原妓楼（成八幡支店）元楼主の手記』所収

しかしながら、明治 38 年（1905）に日露戦争が終わると、「洲崎は大変寂れ」てしまいます。このとき、叔父叔母（後述）の奨めで、洲崎の引手茶屋をやめて吉原の江戸町一丁目に移り、貸座敷を開業することになりました。

ところが、明治 44 年（1912）4 月 9 日に吉原の大火があり、その貸座敷が丸焼けになってしまいました。そこで再び洲崎に戻り、二丁目の十間通りで開業することになりました。

しかし、その 3 ヶ月後の 7 月 26 日に、こんどは洲崎を大津波が襲いました。ちょうど吉原が大火災から復興しつつある時だったので、京町一丁目に 1 軒借りて営業を始め、また、幸いなことに角海老の真裏に見世があったので買い受け、「華々しく営業を始め」ました。この最終に買い受けた見世について、手記には、

娼妓も増やし、三階建で間数も多かったせいか、随分繁昌したのを覚えている。

と記されています。

先ほど「叔父叔母」と書きましたが、それは、幸吉の母・せいの妹夫婦のことです。せいは、荒川金次郎の長女で、中野家に嫁ぎましたが、次女ふさは松島家に嫁ぎました。松島秀と加藤喜兵衛の 2 人は、根津遊廓に貸座敷「成八幡」を開業した人ですが、ふさは、その子供の松島亀治郎に嫁いだのです。

加藤喜兵衛は、根津の大見世「大八幡」の「岡村さん」と義兄弟の契りを結んでいた人で、根津でも顔役的な存在でしたが、洲崎への移転の際に、吉原で開業しました。また、夫は早く明治 12 年（1879）に亡くなったので、その後は妻・秀が 1 人で切り盛りしていました。「吉原の三婆」と呼ばれるほどの有名な女傑だったそうです。

秀の後「成八幡」を継いだのは亀治郎とふさで、その後は、秀の連れ子貞<sup>よしや</sup>と金五郎との間の子供資哉とその妻光恵が継ぎました。吉原での中野家の貸

座敷は、松島家「成八幡」の支店のようなかっこうになり、周囲からも「支店さん」と呼ばれていました。

#### 4 幸吉さんの吉原での仕事開始から廃業まで

成八幡の「秀」同様、支店も「せい」が切り盛りしていました。支店の中野家が吉原に落ち着いたのは明治44年（1911）。この時17歳だった幸吉さんは、その後7年間、横浜の奉公先の貿易商で働き、大正6年（1917）から同11年（1922）までは銀座の貿易商に勤めました。

勤務先から吉原に帰るのが嫌だと思っていたところ、父次郎吉が吉原からほど近い今戸（待乳山公園の東）に瓦葺2階建、3間の家を借りてくれたので、見世で風呂に入ってから帰宅するなどして暮らしていました。

ところが、大正11年（1922）、母せいが突然脳溢血で倒れ、そのまま帰らぬ人になりました。父はその後の関東大震災の心労もたたり隠居状態になったので、幸吉さんが急遽跡を継ぐことになったのです。

吉原での初めての役職は、非常監督補佐でした。火事に備えて各町会の樓の若主人が2人1組で1戸ごとに2階まであがって見回る役で、「防火装束で一通りすると、寒中でも汗びっしょりになる」と書いてあります。これを2期4年つとめ終わると、すぐに協議員に選出され3期6年つとめ、次は三業組合通常会計を2期4年、最後は特別会計を2期4年、廃業するまでつとめました。そして、これらを書き終えた後に、次のように記しています。

貸座敷数が280余軒、娼妓3000、引手茶屋40数軒の大世帯であったが大過なくつとめたので、浅草厩橋税務署から表彰された。

幸吉さんはこれだけでも十分だと思っていたところ、さらに、

営業をつづけているうちに業界の為、一段の骨折をするようになった。といふのも大震災後、婦人矯風会に依る廃娼運動が烈しくなり、業者としてとても安閑として居られなくなったからだ。

と、廃娼運動にも関わらざるを得なくなりました。具体的には、次のように述べています。

浅草を選挙区とする政友会の安藤正純氏、憲政会の頼母木桂吉氏等に働きかけ、配下の代議士が委員会の速記録を取り寄せてくれて対策を講じたり、日本青年館で開催された廃娼大会に潜入して、その模様を探ったり、あらゆる手段を尽くした。

それにも関わらず、「状勢はいよいよ不利」になっていくと同時に、幸吉さん自身、貸座敷業を快く思っていなかったもので、婦人矯風会は「貸座敷を業とする生活上の立場からいえば最大の敵であった」が、「私自身の考え方からいえば」「悉くごもつともな事ばかりであった」と言っています。

昭和 14、5 年（1939、40）かもっと前から廃娼運動はどんどん熾烈になっていくし、幸吉さんの方でも昭和 4 年（1929）に結婚し、もうけた子供が成長するにつれ、吉原で貸座敷業を続けるのは無理だと考えるに至り、密かに新居や仕事、貸座敷の売却などの準備をすすめて、昭和 16 年（1941）3 月末に廃業し、馬橋に移転しました。売却した京町一丁目の見世については、次のように書いてあります。

初代市川段四郎の所有地で、50 坪あり、建物は間口 10 間、奥行 4 間半の木造<sup>とたん</sup>亜鉛葺、2 階建て、延 90 坪あったが、之をたしか金 5 万円で売り渡した（当時の記録紛失）。

一方、本店にあたる成八幡は、光恵の切り盛りで続いていましたが、昭和 20 年（1945）の東京大空襲のとき隅田川に避難して亡くなり、この時、体が弱くて鎌倉にいた夫の資哉は幸吉さんに遺言書を渡しました。昭和 21 年（1946）の資哉死去後、残された親類 4 人に内容を伝え、日をあらためて 30 人近い成八幡の娼妓にも伝えました。その時のようすは次のように記されています。

資哉さんから預かった金一封を旅費として銘々に渡し、『旦那から皆さん帰郷の上は、どうか幸福な生活を送るようにといはれ、あなた方の借財は一切棒引にしたから安心なさい』と伝えた処、『ワツ』と泣くものあり、抱きあって嬉しいと叫ぶものあり、豊に頬をおっつけたままの妓こがあり、この時の感激の有様は劇的の一瞬と申そうか、うまく表現することができない。

このようにして、根津から始まった松島家と中野家の吉原の歴史は幕を閉じました。

## 5 吉原の行事

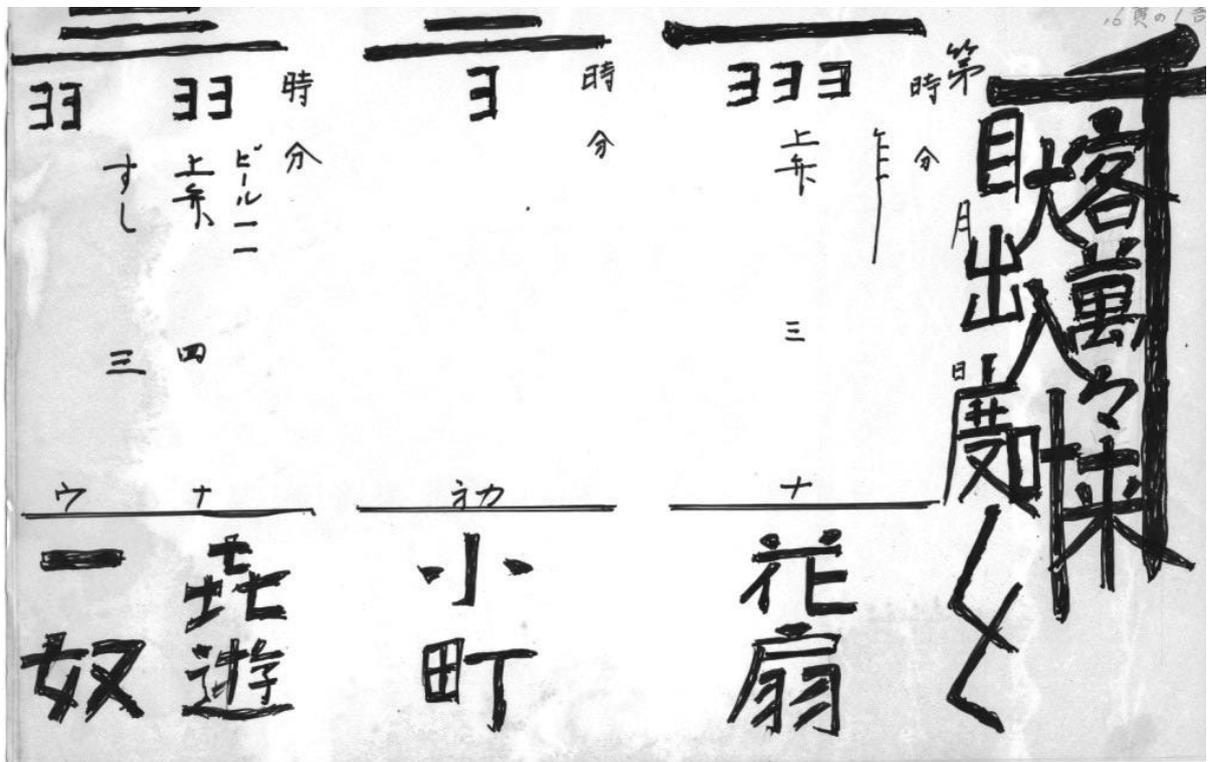
最後に、7章〈廓よもやまばなし〉を見ておきましょう。まず冒頭を引用します。

江戸の繁昌は芝居と吉原と魚河岸とされていたが、古いことは種々文献にあるので、明治の末期から昭和16年3月迄、自分の居住していた30数年の間の出来事を振返ってみると、その移り変わりの激しさが走馬灯のようにまざまざ浮かんでくる。

以下、吉原の懐かしい思い出が綴られるのですが、ここでは項目だけあげておきます。まず、小見出しが付いているので引用しました。次に、小見出しだけではわかりにくい項目に、ダッシュを付けて補筆しました。

- ・ 仲の町の夜桜。
- ・ 先づ廓の四季は餅搗からはじまる。
- ・ 背中合せの松飾り。
- ・ 三業組合の新年会。

- ・節分——大正 12 年（1923）9 月 1 日の関東大震災の後に造られた吉原神社で、景気振興のため始めた。
- ・灯籠——尺五の絹本を飾った。
- ・玉菊灯籠。
- ・菊——角海老楼主人遠藤千元氏は菊作りの名手だった。
- ・酉の市——大正 5 年（1916）、張見世は禁止され写真見世となる。
- ・廓の名物男——角町辰稻辨楼主人山田久次郎氏、角町小川楼小川作次郎氏、角海老楼遠藤千元氏。
- ・廓の明け暮れ——夕方 4 時のおかづ屋や、6 時の張見世と立番による準備（切火・下足札など）。
- ・大引け——2 時の拍子木と明け方にかけての「流し」の世界。  
ただし添田亜蟬坊の流行歌だけは、営業時間内でも警察が禁止しなかった。
- ・帳場——資料として当時の帳面が掲載されている[写真 2]。
- ・雇人の種々の名称——書記・見世・新造・立番（牛太郎とも）・下新・仲どん・まめ・爺や（又は番公）・婆や（または御針さん）など。



[写真 2] 「帳面」

『吉原妓楼（成八幡支店）元楼主の手記』所収

- ・三業組合の組織——取締役・副取締役・協議員・非常監督。
- ・なくなったもの花魁道中に仁和賀——大正4年（1915）11月の大正天皇即位記念で行ったのが最後。

以上で、簡単ではありますが、中野幸吉さんの手記の紹介を終わります。次の吉原さんと不破さんから、幸吉さん以降の、戦後の吉原のお話をうかがいたいと思います。

# 対談

## 生き証人にきく—吉原の昭和史

吉原達雄\*

聞き手：安原 眞琴

### はじめに

吉原は、遊廓として人工的に造られた町なので、町の形も定規で引いたような四角形をしています。その吉原の中に入ると、かつては「五丁町」と呼ばれていましたが、今ではメインストリートの仲之町も含め、7つの町から成っています。

本日は、この吉原の中にいらっしゃる方々に来ていただきました。お1人は、元町会長で、現在吉原神社総代をされている吉原達雄さんです。もうお1人は、現在吉原商店会会長をされている不破利郎さんです。年齢は、吉原さんがおよそ80歳、不破さんがおよそ60歳と、20年ほど離れていますので、吉原の中の人による、吉原の戦中・戦後のお話がうかがえるのではないかと思います。

### 1 吉原さんの生い立ち：吉原に移るまで

安原 私が聞き手になって、まず吉原さんにお話を伺いたと思います。どうぞよろしく申し上げます。

最初から失礼な書き方で恐縮ですが、チラシに「生き証人にきく」と書いてしまいました。でも、これは本心です。吉原さんに人生を振り返っていただく

---

\* 吉原神社総代

ことで、聞いている私たちを当時の吉原にいざなっていただければと思っております。

まず、失礼ではありますが、年齢をうかがってもよろしいでしょうか。先ほどご紹介した中野幸吉さんは大正から戦前の吉原にいらした方、そして吉原さんはそれに次ぐ時代の方と思いますので、時間的な流れやつながりを確認しておきたいと思います。

吉原 どうも。中野さんが80年を語るということで、ちょうど私もそんな感じで、ちょうど今年で80なんです。

私にとって80年というのは、まず、小さい頃、小学時代の頃は田舎に、茨城県ですけれども、学校の休みなんかによく遊んだり、行事のときはよく行っていました。その頃は常磐線で南千住から取手まで行ったのですけれども、降りるともう田んぼだけ。駅前にわらぶき屋が1軒。そこでバスに乗っておっちらおっちら、でこぼこ道を土煙を上げながら霞が浦のほうまで行ったり、荒川のほうに遊びに行ったりしました。綾瀬で降りると、やはりまたそこが田んぼ一面で、そこでコイを捕ったり、また荒川のほうに釣りに行ったりして遊んでいたのです。そんなとき兄貴は、小学校4年の夏休みに釣りに行って、2つ上なのですけれども、荒川で溺れて死んでしまったのです。それは私が小学校2年ぐらいのときです。

私は満州で生まれて、3つのときに日本に引き揚げてきて、満州のいろいろな、なかにし礼さんが書いた『赤い月』など、満州のことはいろいろな事件だの何なのと本がたくさん出ていますが、そういう中で私もやっと日本に帰って来られて、それだけで運が強いと言えます。

両親は、回りに回って山谷へ来て、風船工場を始めました。おふくろは闇で大阪まで自転車のチューブとゴムを買いに行き、それをもとに風船を作って、蔵前のほうに売りに行っていたりしていました。

そういうときにあった事件というのは、ちょうど昭和24年ごろ、キティ台風か何かで隅田川が切れて、うちの軒先まで水が来て、大変だったなという記憶があります。兄貴を亡くして、おふくろもそういう商売が嫌になったのか、たまたま地主さんが「吉原で貸店があるから、あんたら真面目だから良かったらどうだ？」というので、吉原に移るようになりました。

## 2 吉原さんの生い立ち：吉原に移った頃

吉原 昭和 24～25 年頃から吉原に縁があって、ずっと子どもの時代を過ごしてきました。吉原で遊んで、また吉原の盛衰やいろいろな事件を見てきました。私は吉原と山谷を行き来しながら、「山谷の人間としては終わりにたくないな、吉原のほうで住めるようになりたいな」というのは、子ども心にありました。山谷のいろいろなものを見てきていますから。そのころ賑やかだった浅草も、栄枯盛衰というのですか、いろいろなものがなくなって行って、でも自分の中には残っているの、よく生きていたなという感じです。そんなところがざっくりとした内容です。

安原 吉原に移って来た頃のお写真をお借りしているのですけれども。

吉原 僕が来た頃はみんな木造で、いい家なんていうのはなかなかありませんでした。ほとんど木造、バラックのような感じです[写真1]。

安原 犬がいますね。

吉原 犬がいる写真が小学校ぐらいだと思います。立っている写真は中学1年ぐらいではないかと思います。ご覧のように、背後に木造の家がありますが、これは吉原の仲之町の一番真ん中ですが、これは吉原の仲之町の一番真ん中ですが、この時からここにずっと住んでいます。今では小さなビルになっていますが、今もここに住んでいます。

その頃の吉原は、このような木造の家がずっと並んでいて、真ん中に植



[写真] 1 小学校 6 年 (写真提供：吉原達雄氏)



[写真] 2 自宅前 小学校6年 (写真提供：吉原達雄氏)

え込みがあったりして、穏やかなところで、随分あちこち空き地があったので、そこで遊んでいました。

安原 写真に写っている木造の家がおうち兼お店ですか[写真2]。

吉原 山谷から来たときに、両親が赤ちょうちんで商売をやるということで、「ちょっと1杯」を、しゃれて「1 コップ1杯」、コップ1杯ということで、「ワンコップ登喜和」と名前を付けて、何十年もずっとやっていました。

そしてこの家の隣も買って、それで板前を使ったり、女の子も5~6人置いて、新内流しの親子や幫間など、みんな流しでやるのですけれども、流してもお客が付かないから、家へずっと居続けになったりして。

それで、そのときうちもまだ4畳半が4つぐらいと10畳ぐらいの座敷があったので、芸者遊びというほどではないのですけれども、みんなお座敷遊びということで、随分小唄を習ったり、都々逸を習ったりしながら、どんちゃん騒ぎをやっていました、朝3時、4時まで。

安原 赤ちょうちんからはじまって、だんだんちょっと貸座敷のような感じになっていったのですね。

吉原 そうです。

安原 この写真は昭和39年(1964)ですが、お店はどこでしょうか[写真3]。



〔写真〕 3 「大黒屋」 (写真提供：吉原達雄氏)

吉原 これは、うちの 1 軒置いたところの大黒屋さんという下駄屋です。下駄といえは、昔は靴ではなくて下駄で、歯が減ると継ぎ足してもらって履いていたし、鼻緒が切れたら、鼻緒だけ売っているからそれを買って、自分で直しながら生活していました。みんな貧しくて、小学校へ行けばみんなボロボロの、継ぎはぎは当たり前だし、青っ鼻流して、手で拭きながらというのは何人もいたし。随分みんな貧しかったんです。

安原 今でも大黒屋さんは下駄屋さんというかスリッパやタバコなどを商っていますね。

吉原 今で 6 代目ぐらい。それで、この写真は、その大黒屋さんの前で、町会のみんなで掃除をやっているところです。うちのおやじも写っています。左から 4 番目、ひげが生えているのがおやじです。当時おやじも町会長、20~30 年やって、長いことやってました。

安原 道はまだ舗装されていないのですか。

吉原 いや、舗装になっています。

安原 手前の通りは仲之町ですか。

吉原 ええ。そうです。

安原 右側のポストがあるのは何通りですか。

吉原 それは揚屋通りです。吉原も6カ町に分かれていて、あんな小さな町なのですけれども、6つ町会があって、この当時はたくさん住人もいたし、各町会で海水浴や潮干狩り、旅行などと随分にぎやかにやっていました。

### 3 吉原さんの生い立ち：吉原を出て商売を始めた頃

安原 その後、成長され大学にお進みになるのですけれども、何と私の先輩で、立教大学のご出身なのですね。この頃から徐々にお仕事を始められたと伺ったのですけれども。

吉原 いったん吉原を出て、ラーメン屋を5年ぐらいやりましたが、親のほうで、板前や女の子がいないことから店を畳んだので、吉原へ戻って、一人息子だし、また何かをやらなくてはと、大阪へ修行に行き、帰ってから鉄板焼きのようなことを始めました。

安原 いろいろなお仕事の見込みがあった中で、吉原で飲食店を始められたのですね。

吉原 親がよく言って、「勤め人にはなるな」と。「親の死に目に会えないし、おまえは何か自分で商売をやれ」と、そのように言われただけで、何も能力がないから。

安原 先輩、ご謙遜を。

吉原 たまたま中学からの幼なじみが、吉原の伏見通りの外れのほうに小さな長屋のようなところでラーメン屋を始めていて、そこへ年中行っていたのがきっかけです。そこのコックが「手伝ってやるよ」と言って、「それじゃ、ラーメン屋でもやるか」と、親が反対したのだけれども、店を昭和40年から出しました。

安原 何でも大学の4年ぐらいからお仕事を、ラーメン屋さんを始められたそうですね。

吉原 3年までしか行きませんでした。あと、4年は商売やるのに慣れようと思って。配達を1年ずっとやって、大体何とかそのような商売になじんでからと思って。

安原 これはラーメンの配達をしている写真ですか。

吉原 そうですね。これが私の原点で、昭和40年に、これは道灌山通りなのですが、都電通りで、ラーメン1つ運ぶのに、団子坂の上の方まで行きました[写真4]。

安原 かなり距離がありますね。坂もあるし。

吉原 着いたら着いたで高い建物の上まで運ぶ。6階ぐらい。エレベータ

ーないですから。やっと、ほっとして6階に上がって、「よいしょ」と階段に足をついたとたん、岡持ちがポンとぶつかって、おつゆがジャバっと。もう一回雨の中帰って運びました。都電通りなんか滑ったりして危ないんですが、体張ってオートバイに乗っていました。やはり自分の原点はここにあるのかなと。30円稼ぐのに、体を張ってこのような商売やっているのだなと。それが自分の原点で、お金は生きて使いたいなど。そこから商売のいろはを学んで、いろいろな、吉原で結局、鉄板焼き、ステーキのようなものですが、それを始めて、不動産をやって、ウイークリーホテルをやって、下着屋やって、写真、案内所、カードなど、いろいろな商売を時代に合わせてやってきました。

安原 それはみんな吉原のおうち、同じ場所で？

吉原 そうです、吉原の真ん中で。全部。

安原 吉原の中にはお店がないと思われている方もいらっしゃるのですけれども。



[写真] 4 ラーメンの配達 (1965年)  
(写真提供：吉原達雄氏)

吉原 最初の頃はあまりなかったです。私は、昭和47年に吉原で店をやるときに、吉原でやるのに女の子の好きなものは何だろうと考えて、デパートやいろいろなところを巡って、行列ができるようなところを参考にして。そこで粉物、お好み好きだなと思ったわけです。また、食べ物だけでは客単価は上がらないから、お酒を出さなければと。女の子が来てお酒、そうすると男が付いてきます。酒のつまみを考えながら、自分で板前や中華や、大阪に修行へ行ってお好み焼きのぼてぢゅうで働いたり。吉原の鉄板焼き屋では、それらを併せてやったので随分はやりました。

#### 4 吉原さんの生い立ち：角海老楼の思い出

安原 話が少し戻って、小さいときのお話になりますが、お隣に角海老楼があって、そこがとても広くて、吉原さんは遊び場にしていたというお話を伺ったことがあります。

吉原 あれは中学のとき、よく遅刻しました。自分は商売忙しいから親に構ってもらえないので、勝手に起きて、勝手に何でもやっていて、だから、よく遅刻していました。遅刻して学校へ行くときに、角海老の敷地の中、道路になっていて、そこを入りながらブラブラ歩いていきます。そうすると、よく後ろから大きい外車が来て、偉い社長などのすごい人が座っていて、そこから帰っていくのを、柱の陰で女の子の人が浴衣を着てお見送りしていたのを見ながら学校へよく行っていました。

安原 車寄せがあったのですね。吉原さんが目撃した車のうちの1種類はロールスロイスだったとうかがったこともあった気がします。

吉原 また、その頃は部屋もすごく、国会議事堂のソファのようなものがあって、別世界でした。そして、角海老の女の子はお店の前に立って客は引きません。他はみんな引いていました。あそこや大華など大きいところはそういう格式の高いところでした。

安原 ところで、吉原さんは、吉原に関する歴史的な記事をたくさんファイリングされているので、それも今回見せていただこうと思っています。

吉原 吉原だけじゃなく、東京はみんなそうだけど、吉原も江戸時代から何回も焼けているし、明治も関東大震災も、とにかく焼けて資料が残っていません。だから、いろいろな本などから記事を集めて、そこから自分なりに推測したりしていますが、学術的に吉原のことが資料に書かれているというのは少ないです。だから僕はもう今ここで、女郎屋のおやじに聞いた話や、目の前で見たことなど、いろいろなあれを話しています。

安原 この資料の写真に、角海老楼の写真がありますね[写真5]。昭和8、9年ごろなので吉原さんの時とは少し違うかもしれないのですが、門を入ると車寄せの砂利道がありますね。もっと以前は時計台があったと聞きます。服部時計店ではないですけども、時計が珍しい時代に時計台があった。近代の角海老楼は、そんな最先端をゆく、ランドマーク的なところだったのですね。この写真には内装も載っていますが、ずいぶん豪華な洋室ですね。

吉原 はい。こんな国会議事堂のようなすごいところでした。

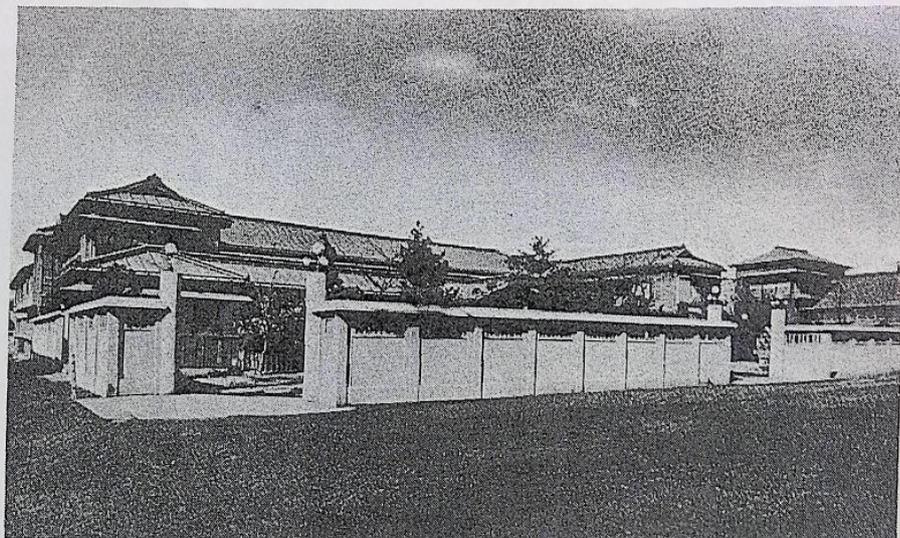
安原 まだまだ木造のバラックも多かったなかで、異彩をはなっていたのでしょうね。

吉原 先ほどの中野幸吉さんの手記にも「中が洋風になっているのは角海老くらいだ」と書かれていましたが、やはり珍しかったのです。こんな豪華な国会議事堂のような内装は。

安原 その後の角海老楼は、どうなったのですか。

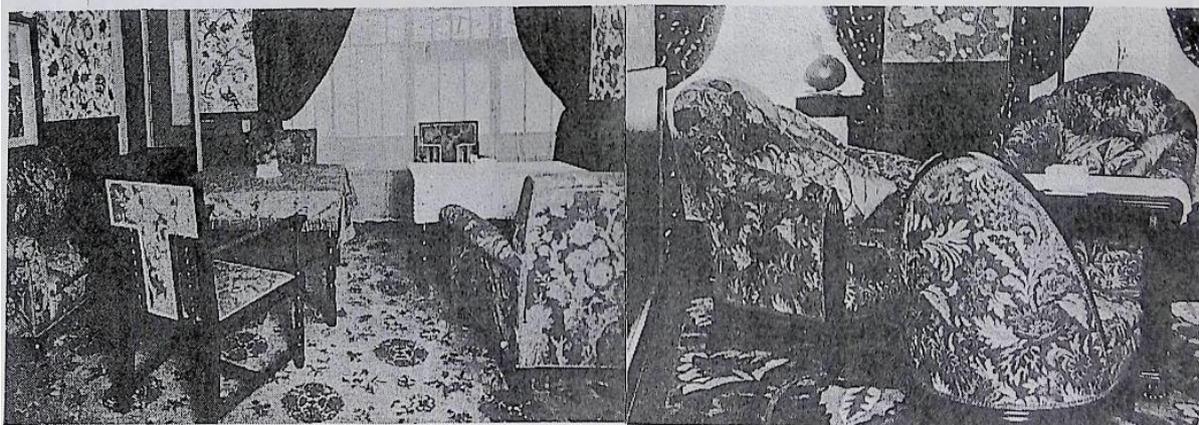
吉原 角海老楼の名前を買ってソーランドを始めた鈴木さんというのがいたのですが、その鈴木さんは、もともとうちの前で輪タクというのがあって、人力車の前に自転車が付いているような、それに乗せて一回りして、女の子に見せたり、案内する商売をやっていた人です。

それで、うちなどにも年中出入りして、南京豆やそら豆やおむすびなどを食べながら、年中行ったり来たりしてしていました。そういうところから始めて、ブルーフィルムなどいろいろなを集めて、そういうので上映してお金を稼いだり、いろいろなことをやっていました。警察で指名手配が入ったときは台湾のほうに逃げてしまったりもしました。こんないろいろなことをやって、今では角海老グループのカリスマ会長になっています。



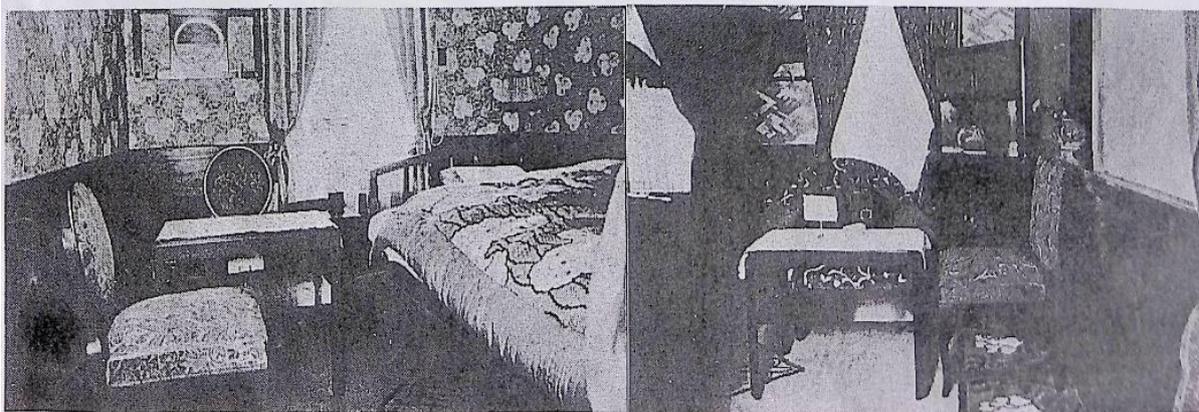
吉原随一といわれた角海老楼の全景

昭和8・9年ごろのサラリーマンの平均月給は40円～60円。吉原の遊興費は泊まりで3円～10円程度であった。ショートタイムといった「チョンの間」でも大枚2円を奮発しなくてはならない。下に示す各部屋々々など高嶺の花であり、未知との遭遇でもあったような気がする



応接室

特等室



[写真] 5 1933、4年頃の「角海老楼」写真

当時の吉原にはそんな人などいろいろな人がいました。いや、やはり吉原に金、みんな遊廓のおやじたちは金をたくさん持っていたので、新年会は熱海で1週間居続けてやるなんていう話もあったし、金はあるから、結局政治家たちもみんな献金したり、大臣のことを「君」付けで呼んでいたなんていう、そういう話もあって、お金が支配していたぐらい、そういう時代もあったようです。

## 5 吉原さんの生い立ち：赤線の前後

安原 少し話が変わりますが、花魁道中のような、そんな資料がありますが[写真6]。

吉原 僕が吉原へ来て、戦後初めての花魁道中をやりました。昭和25～26年ごろだと思います。小学校5年か6年ぐらいのときに、学校は大門の少し先の待乳山小学校だったのですが、帰ってきたら、もう松葉屋の前から、通れないのです、人がたくさんで。黒山になって、両端を見ても、両方の建物の屋根までも黒山で、一つも足を踏み入れることはできないで、それでぐるっと回っ



[写真] 6 「花魁道中」 (写真提供：吉原達雄氏)

て裏のほうから入っていきました。うちもみんな人が、店はもちろん屋根にもいっぱい乗って、すごい人出で動けない、大変だったのを覚えています。うちはそのときラムネを売ったりサイダーを売ったりして、そのお金が棚の下に山のようにたくさんになっていたこともあるようです。

また、角海老がスープを始めた頃は、お酉<sup>とり</sup>さまというと吉原の中が電車のラッシュアワーのようで、人がごっちゃごちゃで、足の踏み場もないぐらいにぞろぞろで、交差点で人を止めてこちらへ人を流していました。僕は小さいから、踏まれるのが嫌だからといって、ほお歯を履いて歩いていました。そのぐらい人がもうがんがん来て、にぎやかな、露店でも何でももう、バナナのたたき売り、寅さんがやっているようなあれや、瀬戸物売りなど、いろいろなものを声を掛けながら、ここへやるし、弁天池の前も、NTTになる前は、サーカスだったり、芝居小屋が建ったり、いろいろなのが出て、とてもにぎやかでした。

**安原** 露天やサーカス、今では考えられないですね。お酉さまと吉原は隣同士で、江戸時代からお酉さまのときは門を開けて誰でも入れるようになっていたと聞いたことがあります。戦後もそんなふうになにぎわっていたのですね。

**吉原** 僕の小学校のころは、大門は鉄のあれはあったけれども、関東大震災から扉を撤去しました。みんな自由で、裏門も、裏口もあつたらしいのですけれども、みんなそういう扉も全部跡形なくなってしまいました。

それから、赤線の頃などは、ヒロポンが、覚醒剤が薬屋で大っぴらに売られていました。みんな弁当箱に注射器入れて、消毒して、あちこちで売っていた時代だから、そんなことでもうかった人も多かったようです。

その他にも、たばこ屋さんでも産婦人科でも、半端ではないもうけがありました。吉原のおかげで、結局、周りの商店街だ、何だ、みんな潤って、いい時代もあったようです。

**安原** ところで、この写真は松葉屋さんですか？

**吉原** 松葉屋さんの花魁ショー[写真7]。もう町会では新年会、忘年会、年中使ってこれを見ていました。

**安原** 松葉屋さんは「はとバスコース」に組み込むなどして、引手茶屋として最後までお客さんを入れていましたね。



〔写真〕 7 「松葉屋さんの花魁ショー」（写真提供：吉原達雄氏）

吉原 そうね。随分あれになって。その前は松葉屋のところはまだ原っぱで、うちのおやじなどはそこで屋台、ラーメンなど、1年ぐらい商売をやっていたこともあります。昭和24～25年くらいかな。吉原へ来てすぐの頃だから。吉原も、あまりみんなぱっとするような感じではありませんでした。

安原 松葉屋が花魁ショーなどをやって、引手茶屋を続けていたおかげで、お座敷が残って、みな子姐さんのような吉原芸者が生き残れたんだと思います。

吉原 そうですね。一時観光バスが来て、年間5～6万人という、随分いい思いをして、息子などはあちこち温泉茶屋や歓楽街へ行くとみんな芸者に顔が広くて、やはりそういう、看板であちこち、随分遊んでいたようです。

吉原は赤線が消える前の時代と、はやった時代と、また消えて、ソープランドで復活してはやった時代と2つに分かれるわけです。それは戦争が終わって高度成長から伸びてきて消えて、またソープランドではやってバブルでポシャって、そういう中に、やはり山谷も栄えて滅んでいく、映画館もなくなっていく、いろいろなものがそうやって周りで、住んでいて、芝居小屋も映画館

も幾つもあったのだけれども、そういうのが全部なくなっていった、だから、いろいろな意味で商売がなくなっていったというか。

**安原** 昭和の吉原の変化を目の当たりにしてきたのですね。

**吉原** 大げさに言えば、振り返ると死屍累々です。だから、よく生きているなという感じです。やはり日本の国も国としての主張もないし、役目もしなかったから。戦後は、配給制なんていっても配給はないし、闇米を食べないと食べていけません。どこかの役人か弁護士、裁判官など、「俺は法律を守る人間だから、法律を破るような闇米なんかは買えない」と言って飢え死にしたと問題になりましたけれども、そういう時代を経てきました。

**安原** まずは「生きる」。

**吉原** われわれの親はそれをして生き残ってきているから、だから、あまり国がどうの、そういうのには頼りません。自分たちで生きていくという。だから、そのような血はみんな残っています。今はもう上げ膳、据え膳だけれども、もう白が黒となったような感じです、自分たちからすると。何もなくて、食べられなくて、栄養失調で死んでいったのが、今は食べると糖尿病だから、食べるな、食べるなという。だからもう、世の中が全て変わって、汚いものは全部隠して表だけという。

肉でも何でも、昔は芝浦で牛でも豚でもハンマーで頭たたいて殺して、それを処分していたのが、そういうのは見せないし、機械でなど、そういう。だから、小さい頃は全部間近にそういうのを見てきているから、それが今は全部隠されてバックになっています。

## 6 吉原さんの生い立ち：弁天池への想い

**安原** 最後に、弁天池についてうかがいたいと思います。この池は、吉原の水道尻の方の吉原病院の近くにありますが、そこに関東大震災のときに、逃げてきた人たちが飛び込んで大勢亡くなった池として知られています。吉原さんは町会長のときですか、そこがボロボロになっていたのを復活させたいと思い、とにかくできることから始められたとうかがったことがあります。



〔写真〕 8 「関東大震災直後の弃天池」 (写真提供：吉原達雄氏)

吉原 始めたのは10年前です。関東大震災のときは、もう吉原で3,000人ぐらい亡くなっています。

安原 資料に、どざえもんと言いますか、池で亡くなった人たちの写真がありますね〔写真8〕。見るに堪えない惨状ですが。

吉原 弃天池では650人ぐらい死んだと言われています。自分たちの足元にそういう人たちがいて、その上で私も長い間吉原で商売をやっているの、恩返しのつもりで工事をしたのです。けれども、なかなかそういうことにお金を使うというのはみんなから力をもらえなくて、逆に「やめろ」「やるな」という話があったので、それは言っても栓のないことで、しょうがないなと思ったこともありました。そうしたら、「後ろで応援するから頑張ってくれ」というソープランドの組合のほうから支援があって、それをきっかけに自分で木を切ったり、塀を壊して提灯を付けたり、ライトをつけたりデザインしたり、あだこうだとやり始めたのです。

近くに吉原神社がありますが、弃天池の方は亡くなった方々が供養されているお墓という感じだったので、真っ暗で、お化けもよく出ていたという話で

す。そういうお墓を神社のように、にぎやかにしてしまおうということで、のぼりやペンキなど、いろいろ塗りました。人々の足が向くように。

安原 なるほど。

吉原 池に鯉を泳がせたり滝を造ったり、訳の分からないことを今でもやっています(笑)。それと、時代とも合ったのです。誰もほとんど来ないような、吉原神社も真っ暗で寂れてしまっていました。近くに児童館があるのですが、館長は弁天池も吉原神社も「もう、前を怖くて通れない」と言ってたくらいです。そんなような雰囲気だったので、町会で管理をしても、お賽銭なんてもうほんの、1ヶ月で5,000円ぐらいしか上がりません、ほとんど。それが10年前に直して、お賽銭もコロナの前は2千数百万くらいになりました。

安原 すごいですね。

吉原 それだけ時代の変化もあったのだと思います。ブーム、今、テレビも何回も取材をして、マスコミも来て、いろいろ取り上げられるようになって。雲泥の差ですよ。人も来なくて、本当に普通の人は歩きませんでした。それが結構今歩くようになって、時代に乗って良くなったようです。

安原 ここに最近の写真があります[写真9]。これは吉原さんが池を造って再現しようとしているところですね。

吉原 弁天池は、私たち子どもの頃は、みんなよく遊んだりしたんだけど、墓守の坊主頭・水常みずつね(貸座敷水常楼の主人伊藤常吉さん。石碑を直すなど吉原さんが子どもの頃は水常さんが弁天池の「墓守り」をされていたという：安原注)に怒られて逃げていました。

それから、NTTができて、小さい池になって、そこに魚もいたけれど、鳥が来たり突っついたりなどして、みんななくなって、もう何百匹と食べられてしまいました。水も出ないで、水が漏ってどうしようもなくて。そこで、祠に絵を描いて、左に滝を作って、池を整備して、のぼりを上げてなど、いろいろやりました。

安原 祠の絵には東京芸術大学も関わっているとうかがったのですが。

吉原 芸大の連中がそばにいたので、それに、「仕事がなかったらここを仕事場にしてやれ」と言って。それで描かせて、描いてもらって。



〔写真〕 8 弁天池があった場所（写真提供：吉原達雄氏）

安原 すごくいいアイデアだなと思いました。そうやって今、暗かったところが明るくなって、人も来たりして。

吉原 そうですね。随分、土曜、日曜は人が来るし、また、供養する人が結構いるので、家田荘子という『極妻』（『極道の妻たち』文藝春秋、1986年：安原注）を書いた、あれも22年ぐらい毎月来て、法要をやって、2年前ぐらい、20年記念で青空法要なんていって、あそこで少しやったこともあるのですが、町会としては毎年9月1日に供養を浄閑寺のお坊さんと呼んでやっているのですが、今年が100回忌です。

安原 今年はそんな重要な区切りの年なんですね。

吉原 関東大震災から100年目になります。そのため少し修理したい。また、記念碑を建てたり、何か行事ができるかなと思っているのですが、どうなるかと思っています。ちょうど100年なので。

安原 残念ながらもうお時間になってしまいました。幼少期から現在まで、駆け足でお話ししていただきました。質問など後ほどできますので、その時にまたお話しいただければと思います。

吉原 そうですね。いろいろなこともたくさんあって話しきれないです。どうも、今日はありがとうございました。

安原 どうもありがとうございました。

**【補足】**

吉原さんが企画されていた弁天池の100周年忌は、2022年9月1日に無事に執り行われました。特別な年なので、浄閑寺のもとご住職の老僧と現在のご住職のお2人がいらして読経をあげ、その後、100周年忌碑の除幕式、さらに邦楽の奉納と吉原木遣りの奉納がありました。吉原の町会長の方々を中心とする、吉原の中の方々30人ほどの法要でしたが、表向き大きなイベントとは異なり、深い祈りの心がこもっていた気がします。来年2023年には、数えの100周年忌を大々的に執り行い、その時には池の整備も行いたいとおっしゃっていました。

## 私が暮らした吉原

不破利郎\*

聞き手：安原 眞琴

### 1 不破さんの生い立ち：現在の町会の役職

安原 次は不破さんにお話しただこうと思います。不破さんはまだお若いので、たしか青年部のようなものをなさっていましたね。

不破 今現在、青年部の部長をやっているのですけれども、もう青年ではないので、もうそろそろ引退しなければいけません（笑）。なかなか後継者がいないので、コロナ騒動で少し、お祭りなどそちらも滞っているので、引き継ぎが少しできていない部分がありまして。一応、今は商店会の会長という肩書のほうが先行しています。

安原 今日の発表では一番若手になりますね。

不破 私は昭和 36 年(1961)生まれなので、吉原がなくなったのが昭和 33 年。だから、吉原がなくなって 3 年後に生まれたということになります。物心ついた、大体 5~6 歳のころなので、多分昭和 41~42 年(1966~1967)のころの吉原からの話になると思います。

### 2 不破さんの生い立ち：幼少期

安原 不破さんのおうちは、代々吉原にあるのですか。

---

\* 吉原商店会会長

**不破** そうですね。祖父が新潟から東京に出てきまして、遊廓を吉原で始めたのが最初です。それは大正の、関東大震災の少し前です。

**安原** そうですか。不破さんにもお写真をお借りしたので、ときどき拝見したいと思います。

**不破** まず、吉原というところは、江戸時代から昭和 33 年（1958）まで 340 年間、元吉原、人形町のほうにあった時代から数えると、昭和 33 年（1958）まで 340 年間続いたところをごさいます、その後は、本当に丸っきりがらっと変わって、私の生まれたときはもう吉原というのがほとんど面影も何も、多分なくなった時代だと思います。

私が幼少の頃というのは、吉原さんのお話にも出てきましたけれども、下駄屋さんがあるのですけれども、あそこの息子さんたちと私は幼なじみでして、年が 1 つか 2 つぐらいしか違わないで、いつも下駄屋さんで遊んでいたのですけれども。

**安原** 吉原の真ん中にある下駄屋さんですね。

**不破** その頃の吉原というと、やはり仲之町通りというのが車もそんなに通っていませんが、信号機もない時代なので、渡るのが少し怖かったような覚えがあります。私も子どもなので、スケールの大きい、小さいというのは今と比べると少し感覚が違うと思うのですけれども、当時は仲之町通りも少し広がったような気がします、今よりかは。

私の幼少の頃、幼稚園、小学校ぐらいのときまでは、遊廓というのが、要するに、私の家もそうですけれども、旅館になったり、他のお店になったりした時代です。私のところも遊廓の造りそのままの形で旅館にしたので、大きさからいえば 100 坪ぐらいの家です。そういう家があった他に豆腐屋さんもありましたし、下駄屋さんもあるし、お菓子屋さんもありましたし、私の頃は松葉屋さんもできていたので、あとはおそば屋さんや床屋さんもありましたし、いろいろな職業の方がありました。

私は角町というところにお店があったのですけれども、角町の裏通りへ入ると、地場産業が靴やベルトの皮産業なので、浅草は。靴屋さんやベルト屋さん、草履屋さんなど多いのですけれども、吉原も裏通りへ行くと、もう私たちの頃は靴屋さんの靴底を作っていたりする小さい工場がたくさんありました。

子ども達もそれなりに住んでいまして、私の父の時代は、すでに食住一致ではなく、やはりお店と住まいが別々だった頃で、また私の子ども時代は遊廓の吉原はなかったの、吉原の旅館にずっと、産まれたときからその住まいの方で生活をしておりました。意外と、昼間はすごく静かです、人通りもないですし。やはり夜になるとちらちらネオンが灯って、旅館をやっている所や飲み屋さんや射的屋さんもありました。

私の小さい頃は上野が近くて、やはり東北の人が多かったのかどうか、それが理由か分かりませんが、吉原は遊廓の跡に民謡酒場になったところがたくさんありました。「七五三」という大きい、吉原さんの町会にあったのですけれども、そこは遊廓をやめて、そのまま民謡酒場にして、100 畳敷ぐらいの大広間があったところで滝が流れていたりするのです。そういうお店があって、こまどり姉妹などそういう方たちが三味線をそこで、若いときに弾いていたという。

**安原** 昭和 40 年代か何か、民謡ブームがありましたね。

**不破** そうですね。かなり、5 軒ぐらい吉原の中にも民謡酒場があって、夜になるとそういうお客さんたちでにぎわっていたという。

**安原** 吉原芸者の四代目みな子姐さんからも「七五三」の話を聞いたことがあります。全国的に有名で、そこで舞台を踏んでから芸能界に入るといって登竜門のようなものになっていたとか。

**不破** そうですね。

**安原** 吉原というと、昔から一貫して遊廓だったというイメージがあるけれども、旅館の時代があったり、民謡酒場の時代があったりと、特に戦後はめまぐるしく変わっていたのですね。

**不破** そうですね。

### 3 不破さんの生い立ち：中学・高校時代

**不破** 民謡の時代が大体、昭和 40 年代続いてあったのですが、40 年代の終わりにになると、今度はまたソープラントが多くなって来るわけです。私が中学ぐらいになると、もうかなり軒数も多くなってきて、高校ぐらいになるともう

150軒以上です。だから、昔の、要するに、遊廓の数ぐらい多くなっていきました。

やはりそれに伴って、私はもう高校生ぐらいですので、そんなに悪い影響、吉原というところ、これは昔からそういうところで、私は祖父母や親には、吉原は子どもの頃、どういうところだったかと聞いて育ってはいないので、案外と、9時になったらもう寝かされてしまったので、子どもの頃もあまり出歩かないでという生活を送っていたのですけれども、高校になるとまた、学校から帰りが遅くなったりするので、そういうときにはネオンが煌々と。やはり当時の吉原はこのぐらい明るかったのかなと思うほど、朝まで24時間明かりがついていましたから、昔は。お祭りも、高校時代のときの吉原神社のお祭りというのも、普通の三社様は長く担いでも8時には終わるのですけれども、吉原のお祭りは12時ぐらいまで担いでいました。

**安原** 夜が長かったのですね。

**不破** そうなのです。もうネオンが消えないので、ずっと。そういう青春時代を送っていましたけれども。地元に住んでいますから、成人してからもそんなに、周りで遊ぶというのがありませんでした。案外と、入るとまた「あその子どもが」と言われる可能性もあるので、なかなか近くでは遊べなかったというのがありました。

**安原** ところで、やはり代々やっているお家はそうやって業態を変えながら続けていくわけですが、それとはまた違う人が経営者として新たに入ってくることもあったのですか。

**不破** そうですね。よそから、やはり流れて入ってくる方も。やはり吉原というのは江戸時代から業種も変われば場所も変わるわけです。だから、角海老さんも結構何回か場所が変わっています。角海老さんの前は三浦屋さんで。角海老もあその、京町のところにあつたのではなくて、本当は揚屋（町）のところに、海老屋というのがあつて、要するに、江戸っ子というか、今でもそうですけれども、言葉を縮めるではないですか。紀伊国屋文左衛門の紀文など。

「片名<sup>かたな</sup>言葉」というらしいです。片方の「片」に、名前の「名」に「言葉」と書いて、そういうのを片名言葉というらしいのですけれども。だから、角に海老屋があつたから角海老になったということです。

安原 そうですか。

不破 だから、今もいろいろ変遷があって、ソープランドも代が代わったり、名前が変わったりというのはしょっちゅうあることです。

#### 4 不破さんの生い立ち：旅館時代ふたたび

安原 外からのイメージだと、吉原はずっと遊廓や風俗街だったと思われがちですが、変遷があるのですね。

不破 今現在はそういう風俗街はやはり有名ですが、私の幼少の頃というのは風俗街からまた少し違う方向に行っていたのです。東京オリンピックがその間にあります。1964年、私が3つぐらいのとき。そのときは地方から吉原の旅館に修学旅行生も来ました。今だったら考えられないかもしれないのですけれども、そういう時代もありました。

安原 上野にも近いし、旅館も大きかったから、修学旅行生のような大勢が泊まることもできたのですね。

不破 そうです。ですから、旅館としての需要もかなりあって。例えば、上野に近いので、行商人、行商人は要するに、今はもう交通網が整備されていて、新潟でも2時間ぐらいで行けてしまって、日帰りができるような世の中ですけれども、昔は8時間、そのぐらい片道かかって東京まで出てくるので、そういう人たちが泊まる場所というのは上野の近辺や浅草の方などというところで、私の旅館も、今もお付き合いがあるところもあるのですけれども、やはり行商の方が来て、私の子どもの頃はよく泊まっていられました。

祭りに参加するような子どもたちも多いし、先ほども吉原さんが言われたように、町会で潮干狩りに行ったり海水浴に行ったりというのは子どもの頃、よく私も行きました。また、大文字楼さんという、大きい江戸時代からあった妓楼が今、吉原公園というところになっているのですけれども、私の子どもの頃はよく吉原公園で遊んでいて、ある夏の時期に、あそこの真ん中にすごく大きい噴水があって、そこにプールのようなものがあったり泳げるようになっていたのです。

それは吉原の町会長の人たちが考えたのかもしれませんが。子どもをそこにプールのようにして入れて遊ばせたのです。1回、そうしたら、みんな結膜炎になってしまって、塩素を入れなかったから。そういう、今では考えられないようなこともありました。おおらかといえはおおらかです。今は案外と「あれやっちゃ駄目」「これやっちゃ駄目」などうるさいですけども。

安原 子どもの遊び場まであったのですね。

不破 昭和の時代は本当におおらかでしたし、別に吉原というところを考えると暮らしてはいませんでした。学校へ行っても、別に差別を受けるわけではないし、いじめられるわけでもなかったのです。集団登校や集団下校がありますよね。あれは吉原の中でも何か所かあって、子どもが集まって、そうやって学校へ行ったりしていました。

## 5 不破さんの生い立ち：ご近所のように

安原 このお写真はお祭りのときですか[写真1]。

不破 そうです。これは吉原のお祭りのときです。写っているのは私の母と、母の隣が妹で、私です。これは昭和41年（1966）なので、私が5歳ぐらいのときです。

安原 この時期のどこにでもありそうなお祭り風景ですね。吉原もこんな時期があったのですね。後ろに写っているのは「ヨシヤさん」というのかしら。

不破 ヨシヤさんというのは髪結いさんです。芸者さんや、昔はやはり遊女さんなどというのは、ここによく髪を結いに来ていました。

安原 そうですか。このお写真もお祭りかしら[写真2]。

不破 私が1~2歳のころ、先ほどのヨシヤさんという髪結いさんのお嬢さんが田宮二郎さんの結婚相手の藤……何といいましたか……（藤由紀子さん：安原注）

不破 私はその方と友達だったので、撮影所に行く前に私の旅館に泊まっていて、通っていた時期があります。

安原 芸能人もお泊まりになっていたのですね。次のお祭りの写真には「角」という字が見えますが[写真3]。



[写真] 1 (写真提供：不破利郎氏)



[写真] 2 (写真提供：不破利郎氏)

不破 これは角町の神酒所です。私の町会です。旅館や不動産屋さんなどがありました。

安原 不動産屋さんもあったのですね。

不破 この頃、ソーブランドはほとんどありません。ここの通りにも1~2軒ぐらいしかないときですから。

安原 写真も、遊廓ではなくどこにでもあるような町の風景ですね。

不破 そうなのです。この写真の向かい側が、先ほどのヨシヤさん、髪結いさんで、その隣が旅館で、その隣の隣ぐらいが私の家です。

## 6 不破さんの生い立ち：ご自宅とその周辺

安原 この写真はどこですか[写真4]。

不破 こちらの写真は、私の家の斜め前ぐらいです。奥が私の家です。屋根にほろがかかったようなところが私の家です。案外と、やはり遊廓の造りで中も広かったので、夜は泊まるお客さんがいたのでにぎやかだったのですけれども、昼間は誰もいなくなるので怖いのです、おトイレなど行くのが。

安原 最近、おうちを工事されているようですが、いつ頃建てられたものでしょうか。

不破 今のうちは私が20歳のときに建て替えたもので、鉄筋コンクリートのビジネスホテルになっています。

安原 それまでは木造だったのですか。

不破 木造です。20歳までは遊廓の名残の家に住んでいました。

安原 トイレに行くのも怖いほど広々としていたのですね。

不破 庭もありましたし。

安原 間取りといいますか、どのようなところに庭があったのですか。

不破 庭は建物の奥です。客室があって、廊下があって、縁側があって、庭があるという感じです。

安原 そうですか。木造からコンクリートのビルへと、建物にも変化がありますね。



[写真] 3 (写真提供：不破利郎氏)



[写真] 4 (写真提供：不破利郎氏)

不破 やはり吉原も変遷してきまして、新しく風営法ができるわけです。それに伴って、いつの時代でもそうだと思いますが、変化せざるを得ないというか。吉原がなくなったのも女性の代議士の影響が大きいですが、風営法ができたのもやはり社会党の土井さんが躍進したときに条例などができまして、12時までしか営業ができなくなるなど変わりました。

今までは24時間明かりをつけてやっていたのを12時で終わりということになりまして。それでも、何とか2時ぐらいまでは皆さん頑張って明かりをつけてやっていたのですけれども、もうだいぶ今般厳しくなりまして、もう10時ぐらいで最後のお客さんを入れて、引けが10時、大引けが12時という。

今はもう12時になると真っ暗な感じですよ。昔はやはり、24時間やっていたときは私も経験があります。産まれてからずっと明るかったので、一番最初に暗くなってびっくりしたのが、天皇が崩御されて真っ暗にしたのです。そのとき、「え？ こんな真っ暗になるんだ」と思いました。やはりだから、それを吉原さんなどが昭和33年（1958）になくなって、真っ暗になったときというのは多分あんな感じじゃないかなと。

安原 経験者は「本当に真っ暗になった」とおっしゃっていますね。



[写真] 5 (写真提供：不破利郎氏)

少し前後してしまいましたが、もう1枚の写真も解説していただけますか。

不破 これも戦後です。旅館になってからです[写真5]。

安原 格好いい雰囲気「みかさ」と書いてあるのがおうちですか？

不破 そうですね。昔はカフェ組合といったのです、遊廓のことを。だから、少しカフェらしい造りにはなっているのですけれども。

安原 なるほど。前に停まっている車もモダンですね。

不破 あれはおやじが乗っていた車なのですけれども、日野のルノーという。日野がルノーからライセンス生産を受けて作っていた車です、当時。

安原：不破さんは何と言いますか、おぼっちゃまだったのですね。

## 7 不破さんの生い立ち：ご自宅とその周辺

安原 この写真の解説もお願いできますか。

不破 これは組合の人たちが旅行に行った時の写真です[写真6]。



[写真] 6 (写真提供：不破利郎氏)



〔写真〕 7 （写真提供：不破利郎氏）

安原 次のこのお写真ですが、「何とか楼」と書いてありますね[写真7]。

不破 これ、町会の人に聞いても分からなくて。お祝いのあれで、これは遊廓の時代だと思うのです。みんなお店の名前が書いてあるのですけれども、何で「寿」と書いてあってこういう飾り物をしているのか、聞いても分からないのです。聞ける人もだんだん少なくなってきました。私のおやじも 32 で亡くなっているのです。私のおやじが生きていたらもう少し詳しい話がうちのおやじから聞いたのかもしれないのですけれども。

安原 お母さまは。

不破 うちの母ももう亡くなったのですけれども、新潟出身です。嫁いできたときにはもう遊廓はない時代なので。だから、ちょうど吉原も、これから戦後復興してきて、昭和 28 年（1953）、29 年（1954）ぐらいに、これから少し復興してきたから、見返り柳も新しく建て替えよう、いろいろな整備をしようか



【写真】 8 （写真提供：不破利郎氏）

なといったときに廃止になってしまったので、私の祖父あたりはがっかりしていたのではないかなとは思いますがけれども。

**安原** これは浅草の国際劇場の写真ですね[写真8]。私は SKD のファンだったので通い詰めていました。日本一大きな劇場だったのですよね。もうこんな大劇場は作れないだろうと言われていたとか。

**不破** 総見のときのなのですからけれども。これ全部吉原の女の人たちです。芸者さんと遊女含めて。これは戦前ですので、昭和 14～15 年（1939～1940）辺りのあれだと思います。まだ、太平洋戦争になる前の。

**安原** 江戸時代に遊女 3,000 人と言われていますが、国際劇場が満席になるなんて、すごい人数だし、お金もかかっているだろうし、壮観ですね。

**不破** 国際劇場がたくさんになるぐらいには、やはりいました。ほとんどの人が日本髪を結っていますね。

**安原** よく写真が焼け残っていましたね。

不破 多分、私は縁故疎開をやっているのです、祖父が新潟なので新潟のほうに疎開をしました。そういうときにアルバムも全部持って行ったと思うのです。だから、焼けないで、少し残っていたというのはあります。

## 8 最新版「吉原細見」

安原 貴重なお写真を見せていただきましてありがとうございました。もうお時間になってしまいました。

不破 あと、宣伝というか。商店街で今度「吉原細見」というのを新しく作る予定なのです。26 ページぐらいなのですけれども、江戸時代から昭和の 33 年（1958）までのことが大体書いてありますので、これは見本ですけれども、今月の末辺りには出来上がってきます。もしよろしかったらお求めください。

安原 吉原細見は江戸時代からあった吉原のガイドブックですが、それを現代に再現させたのですね。

不破 そうです。少し前にも出しました。だけれども、昔はページ数が薄いので、今回は少しボリュームを付けて、町の商店会のお店の紹介も裏に出ていますし、お散歩マップのようなものもありますし、これを見ると大体今の吉原のことや江戸時代の吉原のことなどが分かります。よろしくお願ひします。

安原 さすが商店会長。不破さんは吉原の広報部長のような存在なのです。どうもありがとうございました。

不破 ありがとうございました。

コメント

## コメント

田 中 優 子

安原さん、吉原さん、不破さん、本当にありがとうございました。

私は江戸時代を研究していますので、今日のテーマである大正、昭和の吉原はあまり存じ上げません。ですから、今日は大変勉強になりました。吉原とは何かというテーマについて私は大変関心があり、2021年10月に『遊廓と日本人』を講談社文庫で出しました。

その本でも、ほとんどは江戸時代の吉原について書きました。江戸時代は吉原以外にももちろん遊廓が全国にあったわけです。全国で25ヶ所の公認の遊廓と、それ以外の「岡場所」と呼ばれる公認でない遊廓がありました。けれども、それら全てに触れることはできません。やはりその象徴であり、集大成である吉原に絞って、『遊廓と日本人』を書きました。吉原は最終的には売春禁止法によって、なくなっていきます。なぜなくなるべきだったのか、という視点も、非常に重要な視点でした。

『遊廓と日本人』は最後のほうで、明治以降、娼妓解放令が出たことも書きました。それでも吉原は消えませんでした。しかし次第に衰えていって、最終的に戦後に消滅していきます。しかしそれでも、明治初期の吉原は非常ににぎやかで、経済的にも大変盛り上がっていました。

私は2004年に『樋口一葉「いやだ！」と云う』という本を出しました。そのなかで『たけくらべ』に出てくる吉原について詳細な解説をしました。『たけくらべ』は樋口一葉が1895年から96年にかけて『文学界』に連載した小説です。その前の1893年から94年にかけて、一葉は吉原の近くの竜泉寺町に暮らしていたのです。『たけくらべ』はそのころの吉原を、「呼び出し」と言われた一流のおいらんの妹であり、かつ「廓者」と言われた従業員の子供でもある少女の視点から、描いたのです。

明治政府が「マリア・ルス号事件」をきっかけにして芸娼妓解放令を出したのは1872年です。その翌年、「貸座敷渡世規則等の制定」がおこなわれ、遊女屋（妓楼）と遊女が分離されます。遊女屋（妓楼）が遊女を働かせているのではなく、遊女が自由意志によって座敷を借りて営業をおこなっている、という体裁にしたのです。そこで遊女屋（妓楼）は「貸座敷」という名称になります。『たけくらべ』はそれから20年後の吉原を描いたわけで、やはり「貸座敷」の世界ですが、吉原は衰えるどころか、大変な賑わいを見せています。

『たけくらべ』の描写は、実は吉原の中に入っていないのです。吉原のことを「なか」と言うのですが、吉原の外からのみ、その繁栄を書きました。吉原に入っていく芸人さんたちの歌やにぎやかさ、活気、そういうものを書くことで、吉原の活気を描いたのです。まるでミュージカルのような作品です。そのミュージカル的な世界も、吉原の一面でした。つまり芸能としての吉原です。芸能は、かつては遊女のもっていた技能でした。江戸中期ごろからは、芸者さんが担った能力です。とりわけ秋の一ヶ月間におこなわれる「にわか祭」では、全国でもっとも優れた吉原芸者の力が存分に発揮されました。そして「なか」の芸能だけではなく、正月をはじめとして一年中、数々の大道芸人が吉原に入って、客の要望に応えたのです。

『遊廓と日本人』の前に、2007年に『芸者と遊び』という本を書きました。もともと芸者は「踊り子」と呼ばれていて、「かぶき踊り」の中から出現したのですが、その後、芸能者としての女性が芸能者であり続ける踊り子と、芸能者でなくなって遊女になっていく、その2種に分岐していった、という歴史を書いたものです。歴史的にどうして芸者が生まれたのかを解くには、その分岐を書かなければなりません。その上「芝居町」というものができて、芝居町と遊廓という、都市の中の2つの町が独立をしながら非常に活気を帯び、「悪所」と呼ばれながら大きなお金が動き、男性の働く場所が芝居町、女性の働く場所が遊廓、と分岐されていきました。

さらに、吉原の中では遊女と芸者と分岐していきました。踊り子だった人が吉原の中に入ってくることによって吉原芸者になります。芸者は吉原だけではなく全国至るところにいたのですけれども、それでも、吉原芸者は特別に優れた、素晴らしい芸者さんになっていきます。つまり日本で一流の、最もいい

芸者に育っていくという道をたどりました。その辺のことを『芸者と遊び』で書きました。

遊女や芸者の歴史は、日本文化にとって非常に大事な歴史で、私も関心を持ってきました。あまり大正、昭和については知らなかったというのは、やはり理由がありました。それは江戸時代では、遊廓はさまざまな日本文化をそこに集中して表現しているところだったのです。建築、内装、年中行事、三味線や唄や踊りの芸能、生け花、茶の湯、日常の慣習、独自の廓言葉、着るもの、食べ物、飲み物、みやげ物、櫛・こうがい・かんざし、履物、髪型、もてなし、作法などが、廓に集中していたのです。江戸時代の遊女は、茶の湯、生け花、和歌、俳諧、漢詩などの能力を持っていました。そのように育てられてきたわけなので、吉原は、いわば遊女をサロンの女主人にした文化の中心だったのです。だからこそ非常に多くのお金が回っていて、文人たちが集まる場所になっていました。その文化の面が大正、昭和になると急速に衰えていくということがありましたので、今まではあまり関心を持ってこなかったのです。

けれども本日、このシンポジウムのきっかけになった中野さんの資料を見ると、江戸時代までなかった節分の行事を始めた、ということが書かれています。それから、江戸時代の吉原で盛んだった「花びらき」という行事があります。毎年、桜の季節に中之町通りに植木屋から桜の木を運び込み、植え込みに植え、そこに桜並木を作ったのです。それが江戸・明治で途絶えたとは思っていたのですが、中野家が営業を始めたときにはやっていた、というのです。非常に詳しく書いてあって、青竹の柵の中にソメイヨシノ数百本を植えたとあります。ソメイヨシノは江戸時代末期になるまで、ありません。そこで廓の桜も江戸末期からソメイヨシノに変わったことが分かります。それを数百本植えて、そこに、花茎、つくばい、トクサなどを配置したと、大変具体的に書いています。さらに、そのときに引手茶屋におそろいの花のれんを掛けて、夜にはぼんぼりに火を点じて、遊女や客たちが夜桜を見ていた、と書いてありました。

桜並木は吉原の象徴だったので、例えば明治になって根津に公認の遊廓をつくる时候にも桜 200 株余りを植え、「総門」も構えた、という記録があります。つまり総門と桜、この 2 つがあると吉原的な空間になる、ということだっ

たと、分かります。こんなふうにして、江戸時代に確立した吉原から何を引き継いでいったのか、明治、大正、昭和を見ることによって分かるのだと、本日、感じ取ることができました。

さらに中野さんの資料の中には、灯籠祭りもやっていた、とあります。これはお盆のお祭りなのですが、絹に一流画家たちが山水画や花鳥画、美人画などを描き、これを切り灯籠にする。それらの灯籠を引手茶屋の軒先にずらっと掛ける、という情景です。なんと華やかなのでしょうか。10月には菊をやはり中之町通りの植え込みに植え、菊の節句をやりました。11月のお酉さまのときには積み夜具をしました。つまり夜具、布団ですけれども、これを積んで見せるという行事があるのです。これは11月にやっていたという記述があります。

江戸時代の吉原の年中行事などと比べてみたときに、失われたものもあるのですけれども、しかし、非常に重要なものは残っています。努力して吉原の文化を残してきたのだということが分かりました。

先ほど安原さんが見せてくださった動画で、下足札の動画がありました。とても面白い動画でした。50~60枚を1束にしたものを七五三に音を立てて、その後、お塩を盛る、というのは、中野さんの資料の中にもあります。このようなことも続けてきたのですね。

吉原は午前2時に大引けとなります。「大引け」というのは、吉原を閉めます、という意味です。閉めるタイミングは10時、12時、2時など何回かあるのですが、近代まで行われていたのは午前2時の大引けです。拍子木が打たれ、電気が消され、戸が下ろされ、そして街路灯のみになる、という記述が中野さんの資料にもありますので、やはり夜中の吉原の独特の雰囲気があった、ということが分かります。

そして、新内や浪花節、義太夫、声色の流しなどがこの大引けの午前2時ごろから入り始めるのです。街路灯のみの薄暗いところに。その記述は1920年から30年ごろの他の文献にも見られます。新内節の岡本文弥が着物を着て吉原を流したのが、やはり大引けの後だったと言います。岡本文弥自身が発言しています。男性2人1組で2丁の三味線を弾きながらゆっくりと吉原を歩いていくのです。桜の季節などに「明鳥」や「蘭蝶」の一節を歌ってくれと言われてます。「歌ってくれ」と言われる、ということは、まだ起きている客たちが

いて、声を掛けたということなのですが、桜が満開の夜桜の中を、新内を歌いながら歩いていくのです。このような吉原空間の芸能の在り方の風情。吉原に芸者さんがいるからこそ、このような芸能の質が保たれてきたのだと思います。

本日の冒頭に戻って、4代目のみな子姐さんについてです。芸者さんはただ芸があればいいというのではなくて、所作やたたずまい、会話の力、振る舞い方、それを支える精神的な成熟と洗練など、そういうことの全体が芸者さんの文化です。ですから、三味線ができればいいでしょうということではありません。つまりお稽古ができればいいということではないという意味で、やはり芸者さんの文化は、技能と共に身体的なもの、精神的なものの全体なのです。同じように、遊女の場合にはやはり性を売ればいい、という問題ではありません。会話、教養、挨拶の仕方、振る舞い方、着こなし方、香木の使い方、動きの洗練、お酒の飲み方、文章力、手紙の筆さばき、人間についての価値観、このようなことは藤本箕山や井原西鶴の時代から書物で伝えられてきました。遊廓の中では花魁から新造に、あるいは弟子たちに、身体的かつ精神的な伝承として、また言葉の伝承として、伝えられてきた文化なのです。

ですから、伝えられなくなったとき、伝えなくなったときに、これは消滅します。芸者さんはまだ全国にいらっしゃいますから、日本文化としてきちんと支えていこうという心づもりがあって、記録などの方法で伝えることは可能なのですが、遊女の文化はもう伝えていかれません。それは、やはり性を売るという側面があるからです。これについては私が『日本人と遊廓』の中で、重要視したもう一つのことです。遊廓には日本文化が集中して現れた、ということが一つ。もう一つはやはり前借金で彼女たちは働いていた、ということが一つ。この2つの側面を同時に抑えておかなければならないということなのです。

中野さんの記録の中に、10人に1人ぐらいは前借金を返済する者もあると書いてありました。そのぐらゐの割合なのだ分かります。そのぐらゐの割合の人しか前借金は返しきれないということです。返しきれないとどうなるか。また借金をして、もっと下の店に自分を売っていくということを繰り返していくのです。それで零落していくことにもなってしまいます。

このようなことが1872年、明治5年に起きたマリア・ルス号事件で、明らかになりました。これは、もともとは別の事件です。マリア・ルス号というペルー船籍の船に中国人クーリー（苦力）が231人押し込められていて、そのなかの一人が逃げ出してイギリス船に助けを求めたことから起こりました。日本で裁判がおこなわれ、その判決によってクーリーは中国に帰りました。しかしペルー政府がその判決を不服としたことから、国際仲介裁判に発展し、結局、判決を出した日本にも「遊女」という奴隷がいるのではないか、ということになった。日本政府は慌てて、一切解放と身代金即時解消を命じたのです。これを「芸娼妓解放令」といいます。

1873年、新吉原の遊女は3,448人だったという記録があります。ところが、その3年後の1876年には、新吉原の娼妓は711人、つまり5分の1にまで減っています。やはり解放されたのかと思いきやそうではなかったのです。中野さんが1922年に貸座敷を継承したときに、娼妓3,000人と書いてあります。その後、もっと増えます。つまり全く元に戻ってしまっているわけです。

解放令が出た直後はキリスト教団体などさまざまな方たちが入り、手を差し伸べながら親元に帰っていった遊女たちはいたそうですが、しかし、やはり状況は戻っていきました。娼妓解放令の後、「貸座敷」という名前が使われるようになります。妓楼ではなく貸座敷という名前にするということによって、遊女と遊女屋（妓楼）の関係が切れ、遊女が自由意志で座敷を借りて営業している（だから奴隷ではない）、というかたちをとりました。いわば遊女の「自己責任」としたわけです。そこに貸座敷と引手茶屋と遊女の各々独立した「三業」の仕組みが出来上がりました。

結局、中身としてどのくらい変わったのか。つまり遊女が自分の意思で働いていますということは本当だったのか。大いに疑問です。しかも、こういう仕事や商売が戦時中、今度は植民地にどんどん広がっていくという現象まで起こったわけです。

そのようなことを考えていったときに、前借金に拘束された女性の存在について、私たちはやはりきちんと捉えなければいけないのです。日本文化として受け取り受け継いで、伝えていくということを私は今後の吉原にとって、とても大事だと思います。

それと同時に、前借金のお遊女は二度と生まれないようにする。制度としての遊女は出現させないということも、当然、必要なことなのです。

遊女がいなくなってから、吉原には芸者さんは残ったのですけれども、芸者さんの世界での三業は、意味が違ってきます。芸者置屋と料理屋と待合茶屋、この三業になり、待合茶屋に料理屋から料理が届いて、芸者置屋から芸者さんがいらして、そこにお客さんが来る、という仕組みになります。お客さんが予約をした時点で「この料理を何人分、そしてこの芸者さん」と組み合わせていくのですが、これが待合茶屋のマネジメントの仕事なのです。このような仕事も、もてなしの仕事として重要でした。しかし実際にどのようにマネジメントしていたかは、忘れ去られています。

実は、私の母方の祖母は待合茶屋のおかみでした。マネジメントの仕事です。ただし、私が子どもの頃に亡くなっていますので、本人から詳しいことは聞いていません。その待合茶屋のおかみたちは独身率が非常に高いです。芸者さんもそうだろうと思います。独身なのですが、しかし子どもはいる。つまり旦那がいるということです。そのような生活がこの世界にはあった。芸者さんの世界、あるいは茶屋のおかみの世界は、遊女と違って自分で営業をしているわけですから、旦那のことも子供のことも、自分の判断で成り立っていました。

そのような日本の文化の幾つかの面を、遊廓を通じて私たちは見つめ直し、伝え残していかなければならないと思います。

本日、吉原さん、不破さんの話をうかがうことができました。経験とともに語ってくださったそのことが、とても大事だと思います。吉原は江戸時代からずっと、ある種のコミュニティーでした。コミュニティーとして、日本の文化の中で果たしてきた役割を、ぜひこれからも伝えていっていただきたいと思っています。

# 総 合 討 論

## 総合討論

吉原 達雄

不破 利郎

田中 優子

小林ふみ子

司会：安原 眞琴

安原 最後に、登壇者全員でフリートークをしたいと思うのですけれども、質問もいろいろ来ているので、それとあわせてトークをしていきたいと思えます。早速ですが、遊廓と置屋のことについて質問がきています。「遊廓と置屋さんの関係」ということなのですから、これは田中優子先生に伺ってもよろしいでしょうか。

田中 置屋さんというのは遊廓、遊女ではなくて芸者さんの関係です。芸者置屋という言い方があります。吉原の中にも芸者置屋はあったはずで、町の中にも普通に芸者置屋があり、「三業地域」といって、先ほど申し上げた芸者置屋と料理屋と待合茶屋が一緒にあるような地域が点在していたのです。そういうところには芸者置屋があちこちにありました。

遊廓の中では遊女は妓楼、遊女屋ともいいましたが、妓楼というところに遊女がいて、そして、そこにお客さんが行くというのが江戸時代の在り方です。置屋とはいいません。だけれども、先ほどのマリア・ルス号事件以降、娼妓解放令が起こってからは、妓楼という存在が許されなくなります。そうしますと、貸座敷という名前で、「単に座敷をお借りしているだけです」という言い方になっていきました。この場合にも遊女については置屋という言い方はありません。そこは遊女が自主的に貸座敷を借りて仕事をしているという建前になりますので、「貸座敷」という言い方になります。しかしもし、吉原で置屋と

という言葉で何か大正・昭和の時代にあったのであれば、教えていただきたいと思います。

**安原** 漢字が「置く」という字に、何かを「put」、「put on」のような、置くという字に「屋根」の「屋」で「置屋」さんで、吉原だと「芸者屋」さんなどと言ったりするのですけれども、そんなところで、遊廓とは少しまたニュアンスが違うところですね。

では、次の質問なのですけれども、「吉原は遊廓だけでなく花街としての側面がありましたが、その規模はどのようなものだったのでしょうか」というものです。「また、見番はどこにありましたか」というのも付属しています。吉原の見番については私も伺いたいなと思っていたので、伺ってもよろしいでしょうか。どのような感じでどこにあったのでしょうか。

**不破** 吉原の見番というのは、江戸時代は分からないのですけれども、明治、大正、昭和になってくると、吉原公園のほうに三業組合というのができて、そこが置屋さんの、見番のことも兼ねてやっていました。

江戸時代の記事などを見ても、見番は出てきません。そこはどこがどのように指図をして、芸者さんを配置していたのかというのは分からないのですが、遊廓でも芸者さんを何人か囲っていたところがあります。だから、置屋さんというところと、やはり妓楼というところがどのようなすみ分けになっているのか私もよく分からないところがあります。

だんだん、明治、大正になってくると、芸者さんの、置屋さんの地図、地図の中に置屋さんのところも出てくるのであれなのですけれども。

**安原** ありがとうございます。私がみな子姐さんに聞いたら、「見番は吉原にはなかった」とおっしゃっていました。また、置屋と言わないで「芸者屋」という言い方をされていました。

**不破** 浅草は戦後の話ですけれども、三業組合で置屋と料理屋と芸者組合、この3つ、きちんと置屋の組合が浅草の芸者さんにはあるのですけれども、吉原ははっきりしないです。

**安原** ありがとうございます。では、もう1つの質問の、「大正、昭和の富裕客層の変遷、お客さんはどのようなお客さんだったのか」というお話なのですけれども、これも、では、不破さんお願いします。

**不破** やはり大きな会社の社長さんや俳優さん、お芝居やっている方などの関係の方が多かったと思います。そして、明治、大正、昭和となってくると、だんだん遊廓に遊びに行くよりもお茶屋さんで過ごす方のほうが多いです。芸者さんと遊ぶほうがだんだん多くなってきて、お茶屋さんで、松葉屋さんなどだと、某有名な製薬会社の社長さんが、要するにそこで泊って朝そこから会社に出勤するというのも、松葉屋のおかみさんの本に書いてありますけれども、だから、近代になると、やはり遊女の格もだんだん下になってきて、教養もだんだんなくなってくるので、芸者さんと遊んでいたほうが面白いのかなという部分も出てくるのではないかと思います。先ほどの吉原さんのお話でロールスロイスなど、やはりそういう方たちも来たというので。

**安原** そうですね。吉原さん、どうでしょうか。

**吉原** やはり時代時代に、結局、経済成長と比例しているから。やはり吉原は、金がある連中が遊んでいて、一部の金持ちがどんどん金を使ったり、朝鮮戦争で景気がよくなり、みんなオールジャパンで遊ぶようになったり。

結局、その頃は『FRIDAY』や『FOCUS』などいろいろ雑誌に取り上げて話題にするような雰囲気ではなくて、おおらかだったから。人に告げ口したり、投稿したり、そういうムードではないから、おおらかだから、みんな。本場所でも相撲取りは遊びに来ていたし、有名人、芸能人、政治家、いろいろな、昔の吉原の雰囲気です。

うちのお店にも泥棒もすりも政治家も芸能人も宗教団体の教祖も来るし、芸能人なども、お酉さまのときなどは女中部屋で三木のり平や西村晃が酒を飲んでいたりして。いろいろな芸能人などが来ているし、また、接待でいろいろ使うし。スポーツ界でも何でも、その他いろいろ来ていたから。それを騒ぎ立てる雰囲気もなかったから、みんなおおらかだったから。だから、そういうところを芸者は芸者で政治家ともやくざでも、いろいろな人の裏の付き合いの中で来ていました。

だから、うちなども千代の富士がやくざ屋さんによく来ていました。いろいろなことで、でも、そんなのは誰もそのままにして、触らないで、それをずっとやってきて、いろいろな時代背景です。だから、山谷は山谷で、どんどんも

うかったときにはそういうのも遊びに来るし、その時々にお金を持っている人が。

また、吉原は一つの文化として、男が一人前になるのにはまず、先輩が職人でも何でも吉原に連れて行って、筆おろしをさせます。戦争は戦争で、行くときにみんな吉原に行って、「ちゃんと男になってこい」と、そういう文化で、一人前になるためにみんながそういうところに連れていったり、いろいろ指導したり、遊び方など、そういう基本的なものを教えていたから、そういう文化も残っていました。

やはり吉原というのは、今なくなっているけれども、ソーブランドとして気持ちは生きているから、そこでやはり、吉原のセックス業は集中してつくったけれども、そういう集中するところにいろいろなものが生み出されて、陰でそういうものはまだ生きているので、特別な世界なので、目に見えないところで生きていた。まだまだもっと、なかなか大っぴらに言えないような、そういうものも残っています。

やはり将来的には、私は、ヨーロッパでも多くの国はみんな公認になってきていて、きちんと身分を保証して、税金まで納めて、失業保険までもらっているようなシステムになっているから、やはり日本も将来はそのようになってほしいなとは思っています。私の若い頃の吉原の雰囲気はとても今の人は理解できないし、もう考えられないような、女の人が3,000人、客は1万人といて、もうそれが大店を除いてはみんな店先に立って、「ちょっとちょっと」とみんな着物を着たりなどして呼び込んでいたから、そういう世界というのは男にすればわくわくして、一回りしなければ寝られないと、そこに行くのに頑張ろう、そういうあり得ない世界がずっと続いてきたので、特殊な世界です。それがまた400年たってもそこに生きているということだから、それはすごいことだと思っています。まだ吉原は生きているという感じがするのだけれども、そういうのがうまく、いろいろ陰の部分をきっちりしていい形に収まっていけばいいなと思っています。

**安原** ありがとうございます。働いている女性のこともお客さんのことも知っている吉原さんだからこそ、生々しいと言ったら変ですけども、そんなお話をうかがうことができました。そういえばみな子姐さんも固有名詞の

ようなのは絶対言いませんでした。もう時効じゃないのかなと思うのですけれどもおっしゃいませんでしたね。

吉原 マナーです。

安原 そうですね。ありがとうございました。質問がまだあります。「お酉さまの交通整理、誰がしていたんですか」。

吉原 輪タク屋さんですよ。輪タクさんが町の手伝いをしてくれていました。

安原 「押すな、押すな」では、必要ですね。

吉原 ラッシュアワーのような人数でした。交通整理とかそういうのは、吉原で働いていた、今でいえば人力車のような人が整理したり、ボランティアでやっているし、だから、あまり排除、今はぼん引きなどというのは排除になりしているのだけれども、昔はそういうのは町の中に溶け込んでいてやっていたので、今とは全然違う雰囲気です。

安原 もう一つ質問があります。女の人の服装についてですが、時代によってそれぞれだと思うのですけれども。どんな服装の女の人がいらしたのですか。

吉原 やはり吉原もぴんきりがあるから。僕がお店をやっていた頃は、トップクラスの店はきちんとパーマ屋さん（髪結）に行ってセットして、きちんと、ジーパンなどはかないで、トップクラスのプライドを持ったかっこうをしていました。きっちりしなさいという教育の中で、高級店は高級店のプライドを持って、店もきちんと、おもてなしもきっちりしていました。安い麦茶などではなくて、素晴らしい洋酒を、高い洋酒を全部そろえて飲むという、そういう接待をしていました。やはりそれはそれで、みんな研究して精進していたから、いいものはたくさんあったし、それでお客さんが来てくれました。

安い店はジーパンをはいたりして、女の子もプライドがありません。みんなプライドを持って一生懸命頑張っていたのですが、落ちこぼれもたくさんいたし、トップになって1億も2億も稼いだ子もいました。同じ商売をやっても違って来る。僕らはホテルをやっていたのだけれども、15年ぐらいやっていて、やはり飛び降りなど自殺が多かったのです。それはもう吉原の旅館の宿命のようなもので、だから、薬をやったり、いろいろな病気を持ったり、性格的に落ちこぼれていたり、だまされたり、いろいろなそういう隠された

部分がやはり陰にはあるし、吉原から山谷に行く人も随分いたし、山谷は山谷で吹きだまりで、使い捨てで死んでいったというのはたくさんあるし。だから、いろいろな物語があって、一概にこうだとは言えません。いろいろな人間が全国から、世界から吉原に来たから、やはりそういう集中した一つの文化というのは世界に例はないし、それがずっといまだに続いているというのは珍しい世界だと思います。しかも、24 時間、前は時間の制限なしで何でもできた。だから繁盛して、にぎやかだった。

**安原** どうもありがとうございました。

ところで、先ほど、牛太郎が縁起を担いで下足札を鳴らす動画をご覧いただきましたが、これは映画『幕末太陽傳』の 1 シーンです。フランキー堺主演の、居続けのお客さんのお話です。遊女屋の見世を開店するときに下足札を鳴らすなど、さまざまな験担ぎをしていたことは、みな子姐さんの時代まではあったようで、みな子姐さんからお話を聞きました。

**不破** 私も中米楼というところは、喜熨斗さんという、初代猿之助さんのおかみさんの実家ですが。

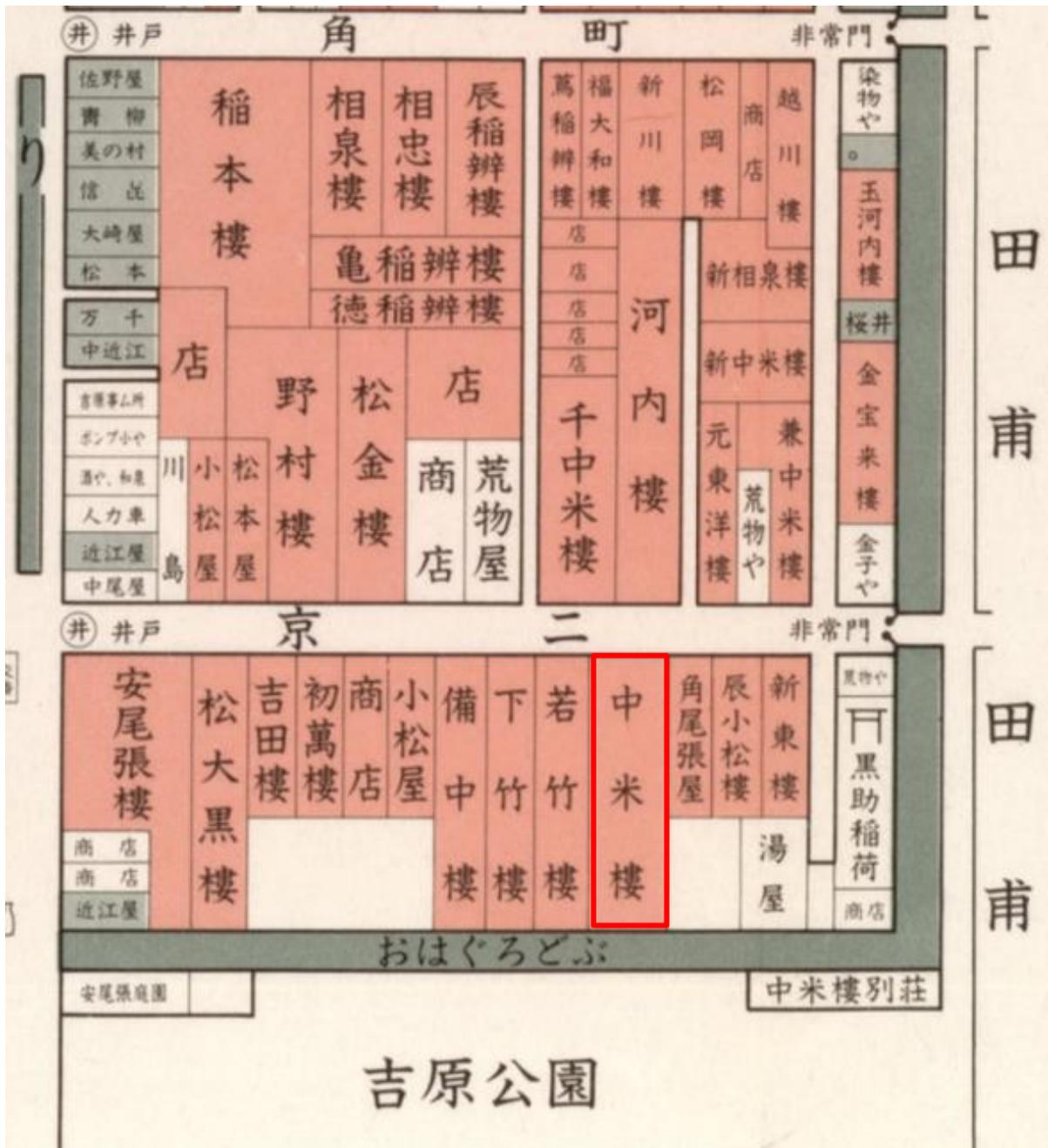
**安原** 吉原の地図で確認してみましよう [図 1]。ここが中米楼ですね。

**不破** そうです。それで、猿之助のために隣に沢瀉楼というのを造ります。沢瀉楼で生まれて、初代猿之助さんの四男か五男の人が市川小太夫という方で、その小太夫さんが本を書いているのですけれども、そこに木札の話が出てきます。私はそこで本は読んで知っていたのですけれども、映像で、私も『幕末太陽傳』を見たことがあるのですけれども、そこまで気が付かなかったです。やはりすごく、あれをやる人は年季がないとできないと本にも書いてありました。

**安原** ちょうど沢瀉楼を買ったのが手記を書いた中野さんです。つながりますね。

**不破** 明治 44 年の大火のときに、沢瀉楼を閉めてしまいます、中米楼も。辞めてしまって、廃業してしまうのですけれども、そのときに売られたのではありませんか。

**安原** そうですね。手記に、段四郎さんか猿之助さんの土地か建物を買ってという、そんなようなことで書いてありました。



[図1] 荒井一鬼製作『吉原今昔図』 (明治27年代)

私からの質問なのですが、田中先生も『江戸の音』(河出書房新社、1988年)という音に関するご本をお書きになっていますが、昭和の吉原にも何か音が聞こえてきたのでしょうか。中野さんの手記に、いろいろな売り声や歌など、そういうのも入っていたこともあり、うかがいたいと思いました。酉の市のにぎわいや、バナナのたたき売りなどは何となく想像はできますが、ほかにどのような音があったのか気になりました。

**不破** 川柳にも残っていたりするのですけれども、要するに、吉原から少し離れたところに入谷、太郎稲荷というのがあって、そこのお茶屋さんの田楽がすごく有名で、田楽を食べに来たのに、吉原から流れてくる音楽に誘われて、そちらに行ってお金を使ってしまったという川柳が残っています。だから、相当音楽はそちらまで流れていたと思います。

**安原** 昭和の時代に、お稽古の音のような、そのようなのも聞こえたのでしょうか。

**吉原** 音といったら、うちは料理屋でどんちゃんどんちゃん毎日騒いでいました。だから、木造の家の上で、どんちゃんどんちゃん毎晩宴会で、新内もやればいろいろなものもやるし、エッチな歌もどンドンやるし、みんなそういうのでやっていましたから。だから、そんな何軒も、そういうのは何軒もはなかったけれども、置屋などそういうのはなくなって、宴会で、金村など何軒か引手茶屋はあったのですけれども、そこでたまにやるぐらいで、あまりそういう音というのは聞いたことがないです。自分のところでは明け方まで、どんちゃんどんちゃんやっていましたね。

**田中** その様子は『たけくらべ』に出てきます。遊廓の外にいても、まさに三階の騒ぎが流れてくるのです。遊廓の中だけでなく、外に聞こえるから、ついそれに誘われてというのはよくあったのではないかと思います。

**吉原** 名残が残っていて、たまには聞こえてきました。

**田中** 私自身は茶屋で育ったわけではありません。もうそのときには戦争で茶屋が焼けてしまっていて、その後、両親が祖母と一緒に暮らしていましたから、その雰囲気は知りません。私は下町の長屋育ちです。

**小林** 質問したいと思ったのが、先ほどの継承すべきことという話でみな子姐さんもお姐さんたちが余計なことを言わなかったし、昔はおおらかだったから、「誰が来た」「来ない」などということもいちいち言わなかったという。この話を伺って、江戸時代の通談義、美学としての意気や通などというのを思い出しました。これで言うと、相手の気持ちを察して状況を見て、やってほしくないことはやらず、やってほしいだろうなということをしてという、そういうことが掲げられています。美学、理想論かもしれないですけども、そういう精神的な美学というのがきっと、ずっと続いていたのだろうなと思ったと

きに、今、先ほど『FRIDAY』などなかったとおっしゃっていましたが、今の社会で失われてきたというのはそういうところかなと思ったのです。吉原にあった精神的な美学のような、行動の美学、精神の美学はお心当たりはありますか。

**不破** やはり江戸の初期や江戸の中期ぐらいまでは太夫などがいた世界です、花魁など。やはり意地と張りの美学というか。花魁道中していても絶対笑いません。笑ってはいけません。だから、そのようなところでは大名と接して、やはり大名よりか上のほうに自分を持っていかなければいけないので、やはりそこは花魁として、太夫としての生きざまのようなのがその当時は感じられたのではないかと思います。

**小林** そういう名残というのは、近代に、昭和になっても残っていました？  
どうでしょうか？

**不破** いや、それは私は分かりません。もう、多分近代になってくれば、そのような、対面も、階級もそのような高い人とは、階級が平等になってきてしまうわけですから。もう大名もいないし。そうすると、そのような対面ももうないだろうし、江戸の中期になるとお侍さんのバブルがはじけます。そうすると、大商人や町人など、大衆の文化に吉原も変わってくるので、そうすると、やはりお侍さんと相対していたときよりも柔らかくなっていったのではないかと思いますけれども。

**小林** 確かに、吉原は江戸中期で太夫がいなくなるのですよね。

**吉原** 吉原の特殊性で、やはりみんな武家も何も商人も、そこへ入れば全部平等、裏です。裏の世界でくつろいで、内緒事、いろいろなことをして、それが全部漏れてしまったら、裏でも何もなくなってしまうから、そういう伝統的なものはずっと今でも残ります。それが水商売、今でも芸者さんでも何でも政治家が密談してみんな漏れてしまったら、それはもう存在価値がないし、それは絶対、商売上の話は秘密ということがイロハのイの字であって、それが守れない、口が堅くないと商売はやっていけません。われわれが商売をしても、やはり終わって、女の子がプライベートな話をして、それをよそに言ってしまったら、店の事情も何もみんな分かるし、あそこは行くなということになります。だから、吉原のそのような特殊性の中でずっと生まれてきたルールだと思う

ので、それが水商売になったり、いろいろなところに隠れて生きていると思います。だから、目に見えないものと、また言葉など、これは言葉で伝わっているようなものもいろいろあるけれども、だから、そのような1つの目に見えない空気というのか、ルールが商売としてあります。

**安原** ところで全然関係ない話になりますが、質問の中に、「吉原に、三業地、二業地のような制度はありますか」というのがあります。

**不破** あまり言わないです。浅草でいえば、まだ三業組合と、今は言わないのかもしれないですけども、一応置屋さんと芸者さんと料亭の区別は付いていると思います。

**安原** そうですね。次に「江戸時代は遊女と遊ぶには何回も通わないといけないと聞いたことがありますけれども、そういう制度はいつ頃までありましたか」という質問があります。

**不破** 一応、最初に会うのは初回といいます。初回はもう会うだけです。裏返して、やっと裏を返してもまだ床入れはできないわけです。なじみになって、3回通ってやっと、床入りになるのですけれども、そこでも振られてしまう場合もあるわけです。そうすると、3回行って3回ともお金を払わなければなりません、ただではないので、同じぐらいのお金を払わないといけないので。

そのような、だから、振るというのもやはり遊女の意地と張りのような、どんな大名でも振ることができたという、身分関係なしに。そこがやはり太夫や花魁のすごさのようなどころがありますけれども。

それで、どの辺までつながっていたかというと、もう多分、幕末ごろにはそういう感じではないのではないですか。太夫や花魁という、太夫がなくなった時点で案外とそういう感じではなくなったのだけれども、やはり初回のような部分は明治まで続きます。2階に上がって、遊女と並んでお客さんがここへ座って、仲介する若い人がいて、「あなたはこの人、あなたはこの人」というのはもう明治までずっと続いていたことなので、それは儀式としてありました。

**安原** 私も中野さんの手記か何かで、引付部屋での儀式のようなものを読んだことがあります。

**不破** 引き座敷があります。

安原 花魁が1回廊下でちらっと見てあいさつをして引っ込むという、それが初回という感じでしょうか。

不破 そうです。だから、初回はもうずっと、間が空いています。お侍さんも壁に付きそうぐらいのところに行かせられて、裏へ返したときにやっと、少し20センチぐらい近くなります。それがなじみになって、やっと杯をもらえたりするわけなので。

安原 それでも気に入らないと違うところへ行ってしまう一人で待たされたりするというのも、聞いたことがあります。

不破 花魁は回らなければいけません。回しというのがあって、好き嫌いは別に、お部屋を回らなければいけません。気に入ったところに行くのは花魁の勝手です。最後に泊る部屋というのは。だから、それはもう明治、大正ぐらいまでは回し部屋のようなのはずっと続きます。

安原 それで思い出したのですが、みな子姐さんは「男ってばかよね」などと言って、花魁は足袋を絶対履かないで裸足で、しかも、やり手ばばあが冷たい雑巾を廊下に用意しておいて、そこですごく足を冷やしてから部屋に行って、「主さん、温めておくんまし」と言うと、ほろっとさせられるという。

不破 そうですね。あと、遊女が何で一年中裸足かはわかりますか。

安原 なぜでしょうか。

不破 階段から落ちないようにするためです。昔の階段はすごく急なのです。

安原 そうなのですか。

次の質問に移りますね。「紋日のようなものはありましたか、大正になっても」という質問がきています。

不破 大正になっても、やはり節句や花見などというのは残っています。やはりそうしないとお金が落ちないので、イベントをどんどん組んでいかないと。だから、俄もぎりぎりまでは多分やっていたと思います。

俄も、話に先ほど出たのですけれども、屋台が2段になっています。それで、お茶屋さんも2階建てになっているので、屋台をお茶屋さんにかっつく付けてしまいます。お茶さんのほうに。そうすると、1階の人は下で芸者さんが弾く音楽を聴いたり見たりできて、2階の人はお芝居や踊りが見られたと

いう、そのような催しの仕方をしてみたいと思います。紋日は多分一番もうけなければいけない日なので、明治まではずっと続いていたと思います。

やはり仲之町の真ん中の生垣というのは、9月だったら重陽の節句、あとはもう月見など、季節ごとに菊を植えたり、菖蒲を植えたりするわけです。桜の他にも。そういうところでやはり芸者さんが何か列を作って仲之町を練り歩いたりはしていて、そこがやはり紋日で、そのときは、江戸時代は紋日という料金が2倍になったそうなので、明治の頃はどうだったか分からないですけども、そういう催しでお客さんを集めてということは続いていたと思います。

**安原** そうですね、確かに。そういう何か催しが無いとうまくいかないですね。

それでまた、思い出したのですけれども、みな子姐さんが「仲之町の真ん中に、こんな大きな燈籠が出てたんだよ」と、両手を大きく広げておっしゃってました。そんなに大きいのかなと疑っていたのですが、中野さんの手記に5尺(約150センチ)の燈籠があると書いてあったので、オーバーではなかったのだと確認できました。このように様々なイベントがあったんですね。

江戸時代と近代の関連のようなことで、田中優子先生いかがでしょうか。

**田中** 行事について言えば、江戸時代では引手茶屋が中心になっていろいろな年中行事をつくっています。お金を出し合う場合には、例えば「花びらき」のときには引手茶屋だけではなく妓楼もお金を払うし、いろいろなところがお金を出し合うのだけれども、いつもコーディネートして、企画しているのはどうも引手茶屋なのです。

そうすると私が気になるのは、明治以降、引手茶屋の力がなくなってきて全くそのようなコーディネートができなくなってきたのか。しかし灯籠の話などを聞くと、やはり引手茶屋がやっていたのかな、とも思います。これから年中行事をつくっていくことも大事です。そのためには、吉原はどういう仕組みが必要なのか。そのことを伺いたいと思います。

**不破** 昔の、江戸時代の妓楼のご主人や引手茶屋のご主人というのは、やはり道楽者でもあったのですけれども、やはり道楽者は道楽なりに教養もありお金もあったので、スポンサーになれたのだと思います。だから、花柳の初代も

やはり花柳という名前をもらったのは妓楼の主人の俳号から花柳をもらっているというのもありますし、だから、そういう部分ではいろいろな、歌舞伎役者のスポンサーになったり、音曲、要するに鳴り物の人たちのスポンサーになったりしていたので、それがやはり今の世の中、お金持ちが吉原には、だてや酔狂でお金を出す人が今いないというのが少し悲しいところで、そこが粹にお金を出すという部分の人が現ればまた元には戻るとは思うのですけれども、なかなかそこまでは行かないので。

今、私たちがやれることは、台東区だったら台東区の補助金をもらいながら、今は入場料も取りながら、俄のまね事などをさせてもらっています。花魁道中も、残念ながらコロナで3年、今年も中止になって3年できていないのですけれども、花魁道中のほうも区の補助金で何とか毎年行うことができていますので、また、そのような文化の面では歌舞伎の人たちや落語家さんなど、いろいろな人とやはりつながっていく部分が多々はあるので、今のところはこのまま行けば多少なりとはつながっていくのではないかと思います。

1回なくなったのを元に戻すのが非常に難しいです。なくすのはすごく簡単ですけれども、それをまた復活させて元に戻すという作業が大変だとは思いますが。それはもう全国の、やはりそのようなところの文化がなくなって、またそれを起こすといっているところはやはりまた大変ではないかなと思います。町おこしだ何だかんだ、お金はあるかもしれないけれども、その普及にどのぐらい、それを毎年毎年やっていって、つなげていけるのかというのが今後の課題だと思います。お祭りは何とかできてしまいますけれども、他の、やはり吉原に特化した部分というのは昔のようにはできないかもしれませんけれども、何か片りんでも残していけたらなとは思っています。

あとは、これから後継者です。後継者づくりをどのようにしていくかというのがやはり課題だと思います。

吉原 今、不破君の話に少し足すと、私もイベントをいろいろやったのですけれども、10年前の話なのですけれども、弁財天で披露宴をやって、そこでいろいろやって、では、それを吉原のイベントとしてやっていこうではないかといつて3年ほど、一番最初、台東区から補助金をもらいました。それもそのと

きは、裏話で、区役所は「吉原なんていうところに補助金なんか出したら大変だと。何言われるか分かんねえから、とても出せねえ」と、区のほうは。

そこで、芸大のアドバイザーの先生が「吉原だからこそ面白いんで、どうしてもこれはやらしてあげなさい」と言って、強引に予算をつけたということで、その次の年には区のほうで出さないで、それで、その先生のベネッセのほうから出してもらって。

それで、3年目は、今度はクラウドファンディングで、みんな吉原の連中も「何でそんなことやるんだ」と非協力的で、芸術なんて、「あれが芸術家だ」など、何だかんだといちやもんを付けて、結局出しません。クラウドファンディングで少し集めてプラスアルファしてやったことがあるのですけれども。

なかなか吉原から金を出すということはソーブが出せばいいのだけれども、今ソーブもみんなよそから入ってきて、さっともうけて、さっと帰ってしまうというスタイルで、地元の間が直接やっているというのは少ないです。そういうことに対してお金を出すということはもうなかなか望めない状態なので、いろいろな寄せ集めの業者が来て、それでやるので、やはり土地に対する愛着や地に足を付けてやるということはあまり考えないで、短期勝負で行ってしまうという感じの人が多いので、なかなか理解を得られないということです。その辺がいろいろ、後継者不足もあるし、資金の問題もあるし、なかなか新しいことに対して応援というのでもできません。

昔からやっている花魁道中など、そういうのに関しては理解はあるのだけれども、それでも資金の半分以上は区のほうから助成でやらなければならないし、地元でそれだけ出してやれと言ったら、やらないような、その辺が、行政のほうも、土地の住んでいる人間も吉原だからという、そういう変な、まだ偏見が残っているし、プライドを持って、文化発祥の地だからなんていうのはわれわれぐらいで、変わり者のほうになってしまうし、まだ一般には受け入れてもらえないような雰囲気なので、その辺が難しいところです。

**安原** 文化継承のようなものの難しさが、少しのお話だけからも伺えました。

**小林** 地域で三味線弾かれる方などいらっしゃると思うのですけれども、それを子どもたちが習う、踊りを習うなど、そういう動きというのはありますか。

吉原 子どもが参加するということはお祭りぐらいで、あとはイベントにはなかなか参加できないのですけれども、ここ何年かでお祭りのおはやしを子どもたちを集めて、それでやるという、小さい子が参加するということも始めて何とかなっているような感じです。努力してやっているのですけれども、それを維持するのはなかなか難しいと思います。

小林 アイデアとして、習い事クーポンを台東区で発行してもらおうなどがありますかね。

安原 どうもありがとうございました。そろそろ時間にもなりましたが、吉原の桜鍋の質問がありました。

不破 桜鍋というのは、要するに、四つ足を食べる文化というのは明治以降です。明治になって富国強兵になりまして、やはり今まで日本人の体形などを考えた場合に、やはり他の諸外国のように肉を食べなければいけないと。兵隊を強くするためにはやはり肉を食べなければいけないのではないかということで肉食が始まるわけです。その中で、馬力を付けるという言葉はその、吉原の土手にある中江さんではなくて、明治時代には中江さんの他に二十何軒ぐらい馬肉屋さんがそこにありました。馬力を付けるという言葉もそこから出てくる言葉で、やはり遊んで疲れて滋養を高めるために馬の肉を食べます。それの他に、吉原に行くのに精を付けるために肉を食べるといふ、案外とそこから馬肉屋さんというのがその辺にはやってきました。

あとは、吉原田んぼというのがあって、浅草も田んぼなのですけれども、農耕馬というのかなりいまして、農耕馬がやはり年を取って働けなくなってつぶして、そこで馬の肉になります。あとは、馬道という言葉も残っていますように、そこで馬を引いてくる馬子さんのような人もいます。

それで、昔は、明治時代にあまり馬に乗っている人はいないかもしれないですけれども、吉原で遊び過ぎてしまってお金が払えなくて、その馬をかたに置いていくなど、そういう部分で需要がそこではあったので、供給と需要がバランスが取れたのがそこで馬だったのではなかったのかなということの中江さんから伺っています。

**安原** ありがとうございます。中江さんという桜鍋屋さんが昔のたたずまいのお店で、吉原土手に残っていますので、そこに伺うといろいろなお話もしてくださいと思いますので、ぜひいらしてください。

あと究極の質問がありました。「生きていくために吉原で遊女として働くのと、家族で飢えるのとどちらを優先すべきですか」というものですが、時代も制度も違いますし、江戸時代には奉公という制度もあったので、現代に置き換えることは難しいですけれども、でも、生きるのは難しいというのは吉原さんがすごくおっしゃっていたので、吉原さんにおうかがいしましょうか。

**小林** 個人的にこういう人がいたなどといった思い出はありますか。日常生活でどのような人だったなどのお話がありましたら。

**安原** では、実際の遊女の方々の日常生活やプライベートなことなども含めまして、もしお話できることがありましたらお願いします。

**不破** 近現代は、要するに、多分歩いていくのも自由になっているだろうし、門も大正になるともう開きっ放しになるので、出入りは自由になると思います。そうすると、着るものはやはり打ち掛けを着て外には出ると思います。あとは、化粧品や自分の身の周りのものが少し江戸時代とは違ってくるなど、化粧品などという部類なのではないかなと思うのですけれども、私もよくそのところは分かりません。

**吉原** 私が商売をやっていた頃ですけれども、お客さんは女の子で、忙しいと終わってうちへ来て、「マスター、今日はこうだったの」「ああだったのよ」と話して帰るわけです。忙しいのだから真っすぐ帰ればいいのだろうけれども、そこで少し休んで、愚痴を言って帰っていくという、うちもやっていました。

そういう中でいろいろな女の子が通ってきて、いろいろな人がいるのですけれども、やはり一生懸命稼いで億という金を残す人もいるし、頑張っただけで駄目になっていくのもいるし、ものすごく純真で、体売っているから、一緒に飲みに行っても何をしても、ものすごく純真です。

やはり記憶に残っている女の子などは、4時に終わるのだけれども、4時までずっと待っていて、それから「あっちに行こう」「こっちに行こう」と飲みに行くのだけれども、飲み終わって帰るときに、土下座して、「今日はマスタ

「一ありがとう」と言って、そういう子もいるし、ホストに入れ揚げて、「あれは駄目だよ」と言っても聞かないで、俺が言った次の日ぐらいに、屋上から飛び降りて死んでしまったり、男に振られて首を吊ったり、自分のホテルで女の子と相談しながら、そういうのもいるし、きちんと真面目にきっちり稼いでお金残して、きちんと自分の目的で使っている人もいるし、時代によって、家のために借金を払うなど、芸者さんなどは「え？こんな人が」なんていうのも随分来たし、やはりそういう人もいるし、不幸にして死んでいくのもいるし、これは救いたくても救えないし、しょうがない人がたくさん私の周りにはいました。

山谷もそうですし、江戸時代からいえば「穢多・非人」など、そういう卑しい身分とされてきた人たちも、みんな悲しい思いをして死んでいきました。だから、それはいつの時代でもそうだし、今の女の子も自殺してよく死んでいます。若いときは売れたけれども、売れなくなって、性格的に少しおかしな子もいるけれども、やはり知り合いで随分死んでいったし、みんな一生懸命男に尽くしても、世間で一般の仕事をして苦労していないせいか、なかなかきちんと歩めません。

店を辞めて女の子に、友達に電話をすると、愚痴話をすると、その女の子がブスで自分より器量が悪いのだけれども、「今日は何人で10万稼いだわ」なんて言うと、女の子は1カ月事務で働いて10万と少しにしかないのに、一晩でそんなに稼がれてしまうと、真面目な仕事がバカらしくなり、「もう辞めた」など、出たり入ったりはすごく多いです。

だから、すごくいい子もたくさんいるし、死んでしまう子もいます。この自由競争の資本主義でしょうがないのかなと思うけれども、みんなフォローがなかなかできません。売春禁止法でも、結局、適当なことを言って禁止にしてフォローを何もしないから、やることは結局そういうことしかないから、また戻って違う形で同じことをやるので、だから、きちんと法律を作っても、作りっ放しで何もやらなかったら、それは絵に描いた餅で何の役目もしないし、かえって職場をつぶして、生きる道を閉ざしてしまうような感じで、やはりきちんとしないといろいろな困った人が本当にそういうところで体を売っても、きちんと生活できるような、いろいろなシステム、法律が必要だと思います。

まだ日本では臭いものにはふたをして、放っぼって、それでという、そういうものばかりで来ているから、だから、つまらない変な世の中になったなと思っています。

以上です。

**安原** 昭和の吉原を生きた中の人のリアルな声が届きましたでしょうか。概念的な、遊女という概念ではなく、生きた1人の女の人、そのリアルなところをお話しいただきました。

ではこのへんで「大正・昭和の吉原遊廓」のフリートークを終わりたいと思います。どうもありがとうございました。

## 執筆者一覧

- 小林 ふみ子 法政大学江戸東京研究センター研究プロジェクト・リーダー  
法政大学文学部教授(江戸文学)
- 安原 眞琴 ドキュメンタリー映画監督  
立教大学・法政大学等兼任講師(日本文学)
- 吉原 達雄 吉原神社総代
- 不破 利郎 吉原商店会会長
- 田中 優子 法政大学江戸東京研究センター特任教授  
法政大学名誉教授(江戸文学・江戸文化)

- ・ 執筆者は初出順
- ・ 所属および役職名はシンポジウム開催当時のもの

法政大学江戸東京研究センター/安原眞琴編

EToS 報告書 14

大正・昭和の吉原遊郭

「江戸東京のユニークさ」プロジェクトチーム

---

2023年3月17日発行

編集・発行 : 法政大学江戸東京研究センター

〒102-8160 東京都千代田区富士見 2-17-1

TEL : 03-3264-9682 FAX : 03-3264-9884

Mail : edotokyo-jimu@ml.hosei.ac.jp

URL : <https://edotokyo.hosei.ac.jp/>

印刷・製本 : 株式会社デジブリ

---



EToS